

Provincial Rule in the Inca State : A Case Study in the Cajamarca Region, Northern Highlands of Peru

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡部, 森哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003956

インカ国家における地方支配 ——ペルー北部高地カハマルカ地方の事例——

渡 部 森 哉*

Provincial Rule in the Inca State: A Case Study in the Cajamarca Region,
Northern Highlands of Peru

Shinya Watanabe

南米アンデス地域に15、16世紀に台頭したインカ国家は、南北約4000 kmという広大な範囲の約1000万の住民を征服した。インカ国家においては、地方の民族集団の支配のため、首都クスコと結ぶ道路網が整備され、各地に行政センターが設置された。本論文は、ペルー北部高地カハマルカ地方の事例を基にインカによる征服に伴い地方社会に生じた変化を検討し、インカ国家における地方支配の特徴を考察することを目的とする。

植民地時代初期に残された史料の情報を分析すれば、インカ国家は各地の民族集団を征服し、手を加えず温存する形で支配下に治めたと想定できる。しかし史料に基づくモデルは考古学データと一致せず、インカ国家の一行政単位であるカハマルカ地方の範囲内にはインカ期以前に土器、建築、墓などの特徴に統一性は認められず、むしろ異質性が認められる。そのため、インカ期の行政単位、民族集団のまとまりの祖型を先インカ期に認めることはできず、むしろインカ期に大規模に人間集団が分断、統合され、再編成されたと結論づけることができる。

The Inca state that developed in the Andean region of South America in the 15th and 16th centuries conquered up to 10 million people in an area extending some 4000 km from north to south. In the Inca state, a road network was laid connecting the capital Cuzco to the administrative centers, which were established in various places, to rule over the local ethnic groups. This article examines the changes that occurred in local societies at the time of the conquest, based on a case study in the Cajamarca region, Northern

* 南山大学人文学部

Key Words : Andes, Inca, state, provincial rule

キーワード : アンデス, インカ, 国家, 地方支配

Highlands of Peru, and considers the characteristics of provincial rule in the Inca state.

The documents of the early colonial period suggest that the Inca state conquered the local ethnic groups and incorporated them under its dominion without any great changes. The archaeological data, however, does not coincide with the documents, demonstrating heterogeneity rather than homogeneity in the ceramics, architecture, and tombs of the Pre-Inca period within the Cajamarca region, an administrative unit in the Inca state. Although we cannot examine the prototypes of the Inca period's administrative units or ethnic groups in the Pre-Inca period, it can be concluded that the local ethnic groups were divided, integrated and reorganized on a large scale in the Inca period.

1 はじめに	8 インカの地方支配——ペルー北部高地カハマルカ地方の事例
2 先スペイン期アンデスにおける土地の概念	8.1 史料から再構成するカハマルカ地方
3 人間集団の名称、場の名称	8.2 サンタ・デリア遺跡の発掘
4 クスコ	8.3 タンタリカ遺跡の発掘
5 リャクタ	8.4 考察
6 モホン	9 インカ様式の土器、建築
7 移動するインカ王	10 おわりに

1 はじめに

「インカ帝国」, 「インカ国家」, 「タワンティンスユ」とは、先スペイン期の 15, 16 世紀に南アメリカ大陸西部のアンデス地帯に台頭した国家の名前である。インカ研究はこれまで 16, 17 世紀に残されたクロニカ（記録文書）を基に進められてきたが、それを読み解くには、記録を残したスペイン人が、アンデス世界、インカを一体どのように理解したのかに留意する必要がある。1960 年代から人類学的理論を援用したクロニカの読み直し、考古学データとの突き合わせなど、新たな方法論が提唱され、研究成果は着実に積み重ねられてきた。現在、インカ研究の新たな方向性を示すためには、従来注目されてこなかった側面に焦点を当て、自明と思われてきたことを問い直すことが必要である。

本稿の目的は、インカ国家における地方支配の実態を説明するモデルを構築することにある。インカ国家における地方の行政単位はどのように決定されたのか、インカに征服、支配されることに伴い地方にはどのような変化が生じたのかという問題を、史料と考古学資料という質の異なるデータを用いて論じていく。

インカ国家の拡大、地方支配のあり方について一般に次のように考えられている。

インカ国家は15世紀半ばに突如として各地に征服を開始し、わずか1人の王の治世の間に整然たる統治基盤が整えられた。その後、4人の王が即位し、その間に支配域は拡張され、南北約4000 kmという広大な範囲の約1000万人という人々が支配下に入った。植民地時代に残されたスペイン人の記録に従えば、第9代王とされるパチャクティこそが拡大を開始した王であり、その息子の第10代王トパ・インカ・ユパンキ、さらに第11代王ワイナ・カパックが征服を続けた(図1)。ワイナ・カパックの死後、その2人の息子であるワスカルとアタウルバが王位継承を争っている間にスペイン人が侵入した。1532年にフランシスコ・ピサロー行がインカ国家の最後の王アタウルバを捕縛し、インカ国家の征服を成し遂げた。

地方支配のため大量の物資、軍隊の移動を可能とするインフラが整備され、インカ国家においては首都クスコ(Cuzco)と各地を繋ぐ道路網が敷かれ、道路上には支配の拠点が設置された(図2)。これらの拠点はケチュア語で「タンプ(tampu)」, 考古学者の間では「行政センター」と呼ばれる。各地の民族集団の人口は、キープという紐を用いた記録装置によって十進法で把握された。人々は物納ではなく労働税でインカ王に納税をし、インカ王は見返りとして臣民に対して織物などの物資を与える、互酬と再分配に基づく関係が成立していた。そしてインカ王と各地の首長¹⁾の関係は、チチャと呼ばれる酒を酌み交わすことなどによって儀礼的に確認された。

以上がインカの地方支配についての、一般的なイメージである。本稿では、インカ国家における地方がどのように決定されていたのか、そして民族集団はどのような構成だったのか、また、地方支配の拠点として設置された行政センターがいかなる性格を備えていたのか、といった点に注目し、考察を進めていく。

本論文の前半部に当たる第2節から第7節で、アンデス社会の基本原則、インカ国家における支配のあり方に関するこれまでの議論を整理する。前半部の議論は主に史料に基づいているが、後半部で提示する考古学データを解釈するための基本的情報である。

後半部の第8, 9節ではインカの征服に伴い地方にどのような変化が生じたかを検

討する。インカ国家内の一「地方」であるペルー北高地カハマルカ（Cajamarca）地方を事例として取り上げ、歴史史料に書かれた内容を考古学データによって検証する。インカ国家の支配下にあった範囲内のミクロな事例の検討を通じて、インカ期に生じた社会変化を説明する、他の地域にも応用できる汎用性のあるモデルを構築したい。

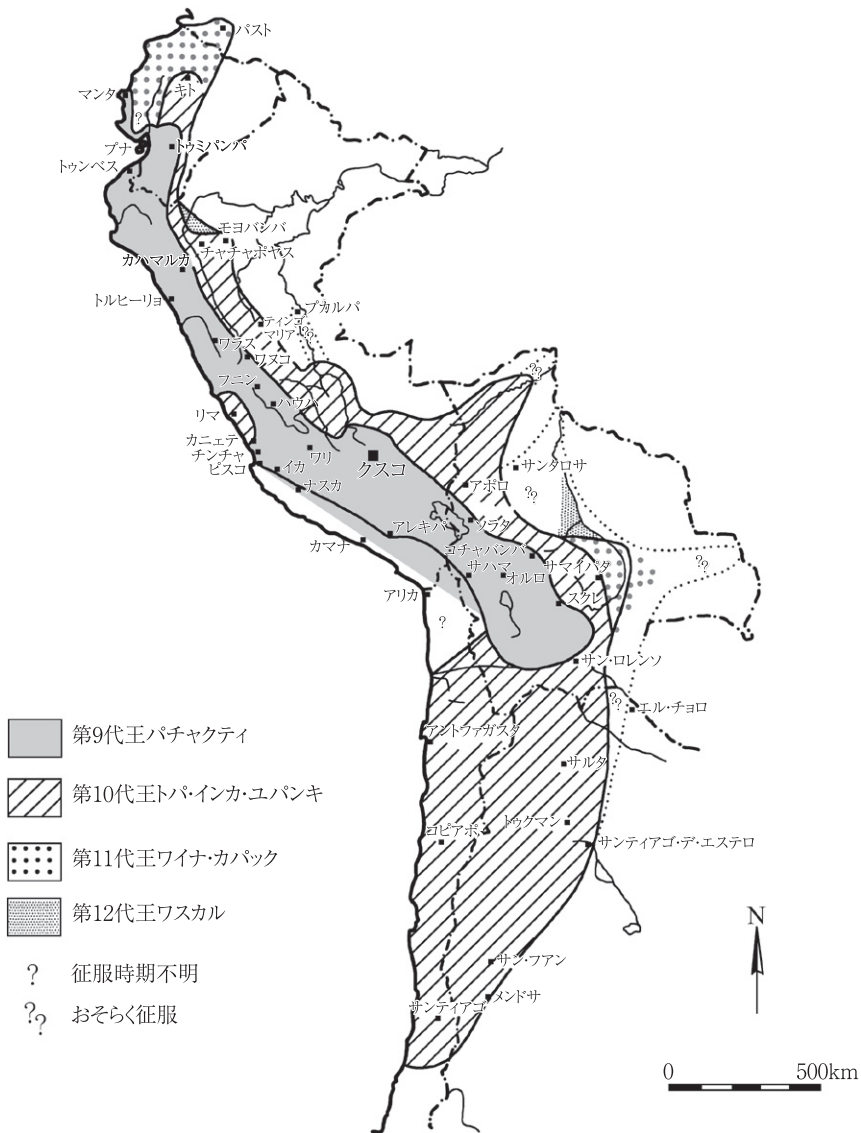


図1 インカの征服過程（Pärssinen 1992 を改編）

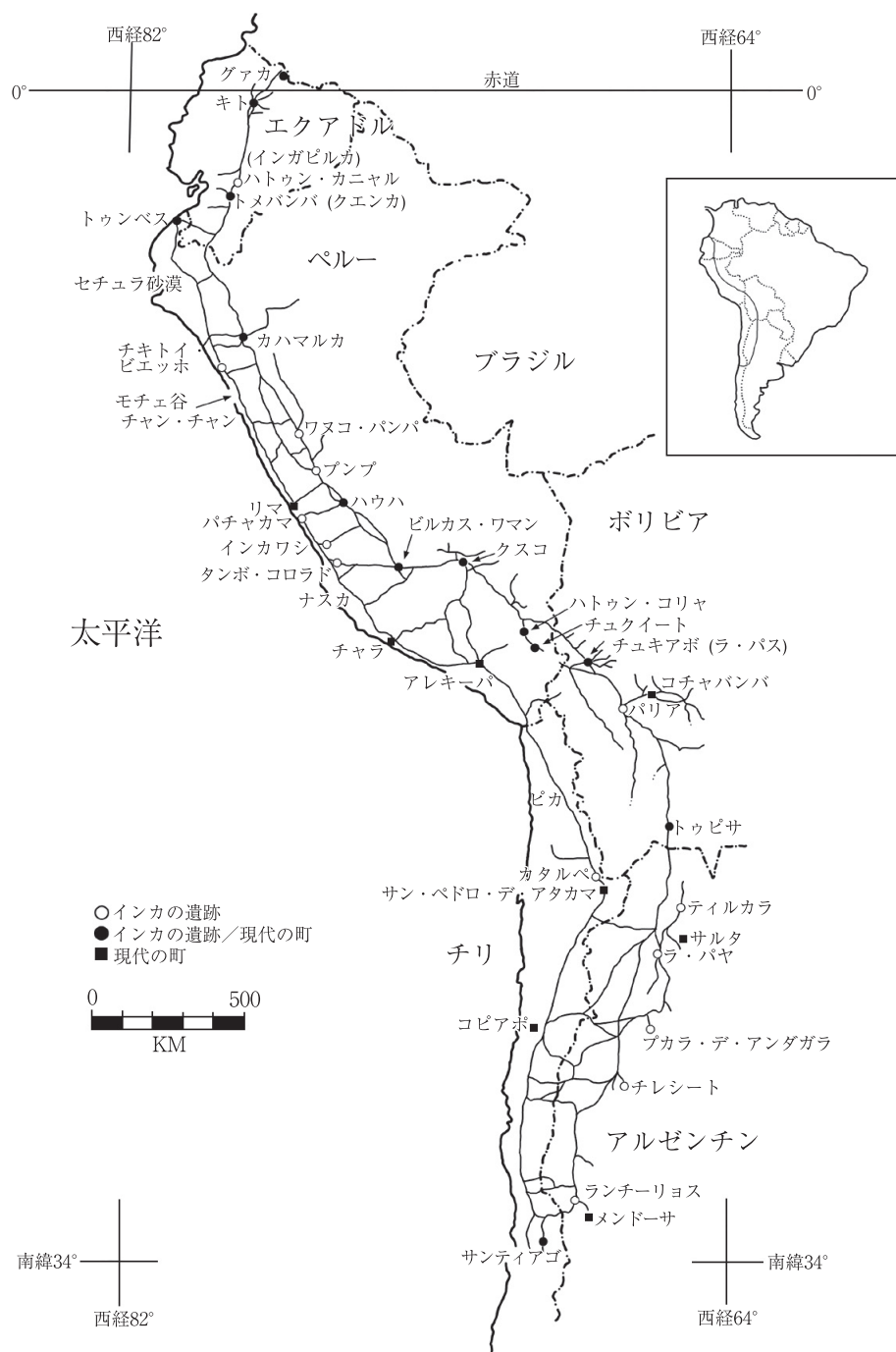


図2 インカ道路網と各地の行政センター (Hyslop 1984 を改編)

前半部から後半部へ議論は連続的に繋がっている。前半部の議論を後半部で提示する考古学データによって再検討するという構成にはなっていないことをあらかじめお断りしておく。

2 先スペイン期アンデスにおける土地の概念

インカ国家はどのぐらいの規模であったであろうか。この問いに答えるために、我々は空間的広まりを想定し、その範囲を地図上に描き込み、そして人間の数、即ち人口を計算しようとする。そのため、インカ国家はペルー南高地に位置する首都クスコを中心に、北は現在のコロンビアとエクアドルとの間の国境付近から、南はチリ首都サンティアゴ付近までの南北 4000 km の広大な領土・版図を有し、その総人口は約 1000 万人であったと説明される (Pärssinen 1992)。こうしたあたかも自明とされてきた事実を問い直すことから始めたい。

ペルー北部海岸を中心に精力的に研究を進めている歴史学者スーザン・ラミーレスは、先スペイン期アンデスにおいては土地は聖なるもので、景観は祖先と神々によって作られたのであり、それを人間が所有するという発想が存在しなかった、と主張する (Ramírez 2005: 40)。そして、アンデスでは土地の絶対的所有権はなく、あったのは用益権だけであった、と繰り返し論じている (Ramírez 1996)。

これは土地財産を重視するヨーロッパの伝統のなかで生まれ育った 16 世紀のスペイン人記録者、そして現代の研究者が理解しにくい点の 1 つである (cf. 大越 2005)。先スペイン期アンデスでは、労働力を投下して栽培した作物、あるいは建設した建物の所有権は存在するのであるが、土地そのものが誰か特定の人に属するとは考えられなかった²⁾。そのため植民地時代にはスペイン人と先住民の間で土地を巡る認識の違いが顕在化していった (Ramírez 1996: 42–86)。

アンデスにおける富の概念は旧大陸のそれとはかなり異なっていた。ラミーレスは、富を示すのは、その人に仕えるあるいは助ける人間の数であり、土地や物資の量ではなかったと主張する (Ramírez 1998)。労働力を投下して栽培した作物、飼育した家畜、建設した建物などは所有できたが、それらは労働力が転化された形として捉えることができる。つまり物質的な富の概念がなかったわけではないが、それらは副次的なものであり、あくまで人間が根幹にあったのである。筆者はここまで紹介したラミーレスの考えに基本的に同意している。

次に、社会（共同体）はどのように構成され、その範囲はどのように規定されてい

たのかについて検討したい。ラミーレスは、特定の首長に仕える人々の総体が社会の単位である、と主張する。つまり人間のまとまりが社会の範囲であり、土地は社会の必要条件ではなかった。存在したのは首長と支配関係を結んだ人々の集合であり、人間一人一人を点で表現すれば、社会とは点の集合であり、その空間的範囲は、線で区切られる面ではなく、点の分布として示すことができる³⁾。複数の社会間の境界は入り組む状態になっており、社会の範囲は不連続となる。アンデスでは、2つの社会を隔てる、線で示せるような地理的境界は存在せず、空間の分断は起こりえなかった。そのためアンデス社会を記述するのに「領土」、「テリトリー」という用語を用いる場合は、土地の所有という意味を除外し、活動域という意味で使用する必要がある。そしてラミーレスのモデルに従えば、社会の範囲は対人関係によって規定されるため、空間に固定されておらず、常に変動することになる (Ramírez 2001; 2005: 217-234)。

アンデス社会の基本的な構成原理に従ってインカ国家が成立していたのであれば、インカ国家の「領域」「領土」「版図」と表現できるような、線で区切られる面的範囲を想定するのは不適切であり、インカ国家の領域はどこまでかという設問自体がバイアスのかかったものである。存在したのはインカ王と支配—被支配関係を結んだ人々の集合と、支配のための様々な装置である。

ラミーレスは王、あるいは首長の支配下にある人間関係の集合を「対人権限 (jurisdiction⁴⁾)」と呼び (Ramírez 2005)、その範囲を「社会的境界 (social frontier)」という言葉で説明した (Ramírez 1985)。「対人権限」とは人間の支配権とその権力の及ぶ範囲を意味し、土地との繋がりを想定しない概念として用いられている。そしてインカ国家をアンデス社会の延長上に位置づけ、それを「対人権限国家 (jurisdictional state)」と表現している (Ramírez 2005: 32)。

しかし果たして土地は社会の構成要因ではなかったのだろうか。ラミーレスの極端な人間中心主義的なモデルを検証するため、次にアンデスにおける人間集団と場の関係について考えてみたい。

3 人間集団の名称、場の名称

「インカ帝国」とはスペイン人によって付与された名称である。1553年にペドロ・デ・シエサ・デ・レオンがインカをローマ帝国と比較して記述し、はじめてインカ帝国という言葉を用いている (熊井 1996)。その後他の記録者も帝国という言葉を使用し、インカ帝国というイメージが形成されていくことになる。また、インカとは支配

者集団を指す名前であり、インカ国家の成員が全てインカと呼ばれたわけではなかった。

最近では帝国というヨーロッパ人によるバイアスのかかった見方、イメージを払拭するため、研究者の間ではインカ国家の公用語であったケチュア語による名称、「タワンティンスユ」が好まれる傾向がある。しかし、この言葉が記録に出てくるのは実は「インカ帝国」よりも遅く、16世紀末以降である。例えば1590年に完成したホセ・デ・アコスタの『新大陸自然文化史』（アコスタ 1966 [1590]: 下巻 292）、1608年にディエゴ・ゴンサレス・オルギンによって編纂されたケチュア語の辞書（González Holguín 1989 [1608]: 333, 616）、17世紀初頭にケチュア語で書かれた『ワロチリ文書』（Salomon and Urioste eds. 1991 [ca. 1608]）、1615年頃完成したフェリペ・グアマン・ポマ・デ・アヤラの『新しい記録と良き統治』（Guaman Poma de Ayala 1987 [ca. 1615]）などに現れる。

このことについてペルーの歴史家マリア・ロストウォロフスキは次のように述べている。

「インカ国家は、住民たちによって、ひとつの国家を形成するものとは捉えられなかった。タワンティンスユ、すなわち連合した4つの地方という統合の観念を含むことばが、スペイン征服以前に知られ使われていたかどうか、われわれは知らない。なぜなら、このことばは、16世紀末以降にあらわれるからである。おそらく、昔から存在していたが、統一の意図は表していない空間区分を表現するために、スペイン人の進入以後使われるようになったことばであろう。」（ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 304; 下線は筆者による）。

彼女の指摘が妥当であるとすれば、タワンティンスユとは、現在インカ国家と呼ばれる過去の社会が、植民地時代に先住民によって対象化された際に用いられた名称ということになる。

「タワ」は数字の「4」、「ンティン」は「一緒に」、「スユ」は「部分」あるいは「地方」を意味するため、タワンティンスユは「4つの部分が一緒になった」という意味である。インカ国家は首都クスコから見て北西のチンチャイスユ、北のアマゾン方面のアンティスユ、南東のティティカカ湖周辺からチリ、アルゼンチン方面に広がるコリャスユ、そしてクスコから南西の太平洋側のクンティスユの4つのスユに分かれており、その4つのスユの集合がタワンティンスユなのである（図3）。そして固有名詞がタワンティンスユ全体ではなく、その下位区分である各スユにつけられていることに注意する必要がある。ではこの「スユ」はどのように使用される言葉であろうか。

ゴンサレス・オルギンのケチュア語の辞書には、「スユ：派閥（Suyu. Parcialidad）」、

「スユ：地方 (Suyu. Prouincia)」, 「スユ：1 スヨ, 1 人ごとの労働に対応したもの (Suyu. Lo que cabe de parte de trabajo a cada vn suyo o persona)」, 「スユニ：土地, 畑, 仕事を分けること, 仕事の部分を与えること (Suyuni. Diuidir tierras chacaras, obras dar partes del trabajo)」 (González Holguín 1989 [1608]: 333) とある。

それよりも古い時期にドミンゴ・デ・サント・トマスによって編纂された辞書には「そのように [しかるべく] 分けられた部分 (suyo: parte assi diuisa)」, 「スユニ：分ける (Suyuni, gui, o suyacuni, gui: ciperar)」, 「スユクニ：分割する (Suyucuni, gui: hazer partes, diuidiendo)」 (Santo Tomás 1951 [1560]: 353) とある。

スユは「分ける」から派生した, 分割された一部分を指すようである。つまりそれ自体が1つの完結した全体, 統合体を示すわけではない⁵⁾。空間区分に用いられる場合もあれば, 人間集団の区分に用いられる場合もあり, スユが何を意味するかは, 文脈に照らし合わせて総合的に検討する必要がある。

確かに植民地時代のケチュア語の辞書を引けば, 「地方」という意味も出ているが, スユの本来の意味は「部分」である。では一体何の部分であろうか。ラミーレスは, タワテンシスユの人間は4つのスユのいずれかに帰属しており, 4つのスユは地理的空間区分ではなく, 本来人間集団を指す概念であるという (Ramírez 2005: 25)。

しかしスユが人間集団の区分を指すとしても, 人間と土地の関わりは常に存在し, 各スユの成員がいる場の集合が結果的にスユの地理的範囲となる。人間は動くためその境界は入り組むが, その大まかな空間的分布を図示することはできる。これまでこの4つのスユの境界を確定するために, 何人かの研究者が取り組んできた。現在最も多くの研究者に採用されているのは, フィンランドの学者マルッティ・ペルシネンによる綿密な史料批判に基づく区分である (図3; Pärssinen 1992)。しかしこれはあくまで4つのスユの大まかな空間区分であり, 明確な境界線で区切られる空間の分断を想像するべきではない。

また, インカ国家には4つのスユ以外にも様々な区分が存在した。それらの区分も, 土地を基準にしたものではなく, 人間を単位にしたものであった。地方の民族集団は十進法によって, ケチュア語で「チュンカ (10)」, 「パチャカ (100)」, 「ワランガ (1000)」と呼ばれる単位にまとめられた。そして各パチャカ, ワランガには名前がついており, それぞれに首長が存在した。ただしこれらは, 全ての人口ではなく, 納税の対象となる成人男性の人口のみを数えた単位, 換言すれば世帯数を基準にした単位であるということに留意する必要がある。

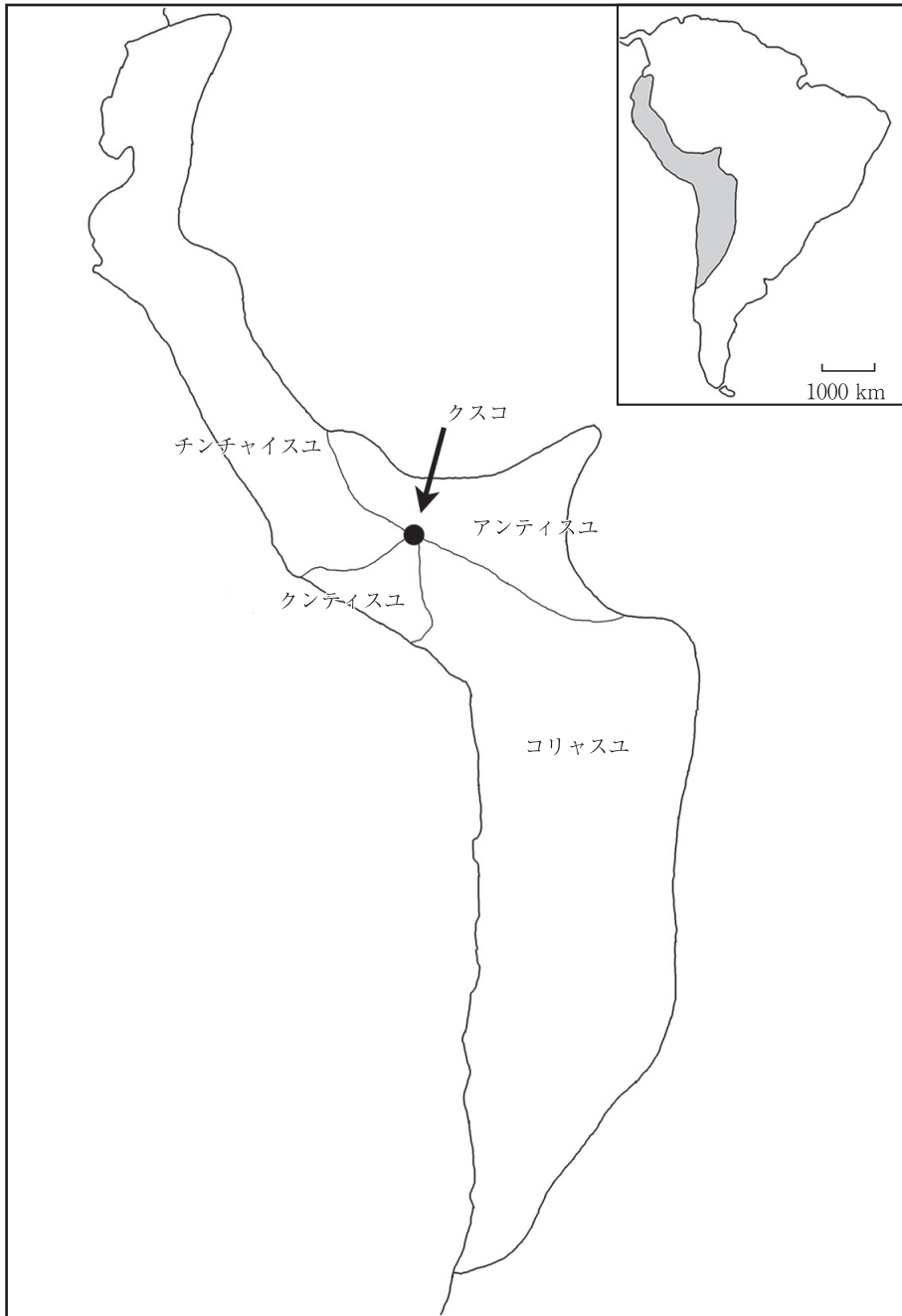


図3 インカ国家における4つのスユの区分 (Pärssinen 1992 を改編)

インカ国家に属する人間集団の人口は、十進法によって全て加算され、一元的に把握されていたわけではなかった。各地の民族集団の単位、行政単位（図4）が最大のまとまりとなっており、例えばペルー北高地のカハマルカ地方では7000世帯（7つ



図4 インカ国家の行政単位、民族集団の分布（Rowe 1946 を改編）

のワランガ), ティティカカ湖周辺のルパカ族では 20000 世帯という規模であった。これら最大規模の人間集団の首長はハトゥン・クラカ (Hatun Curaca) と呼ばれた (González Holguín 1989 [1608]: 55; ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 192)。

ではこれらのインカ国家の行政単位, 民族集団のまとまりを指すケチュア語の単語は何であろうか。エルナンド・デ・サンティリヤンは「グアマン (guamam)」という用語を用い, それをスペイン語で「地方 (provincia)」と訳している (Ramírez 2005: 25; Santillán 1968 [ca. 1563]: 105)。グアマン・ポマ・デ・アヤラは「グアマニ (guamani)」 (Guaman Poma de Ayala 1987 [ca. 1615]: 256, 274, 358) という言葉を用いており, ジョン・V・ムラ等はこれを「インカの行政区域 (distrito administrativo incaico)」と説明している⁶⁾ (Guaman Poma de Ayala 1987 [ca. 1615]: 1290)。グアマニはゴンサレス・オルギンやサント・トマスのケチュア語の辞書には載っておらず, はたしてどの程度普及していたのかは不明であるが, 他に候補となる単語が見あたらない。また, グアマニは 4 つのスユの下位区分ではないため, 質の異なる区分が併存していたと考えられる⁷⁾。

ラミーレスの主張を敷衍すれば, カハマルカやワマチューコ, ワヌコといったグアマニの名前は土地ではなく, 人間集団の単位を指し示すことになるだろう。この行政単位, 民族集団のまとまりは, 初期のスペイン人によって「ネイション (nación)」と呼ばれ, その後「地方 (provincia)」という土地に結びついた概念に変換された (Ramírez 2005: 245)。また, 例えばペルー北部高地カハマルカ地方では, インカ期のワランガやパチャカの名称が現在の地名の起源となっている例がある (渡部 2004b: 28–29)。

では土地はどのような意味を持っていたのか。明確な境界を有する面的な広がりという意味での地方はなかったとしても, 土地を基準とした区分は本当になかったのか。現在アンデスの至る所に, マヨ (川), ウルコ (丘), プキオ (泉), パンパ (平原) などを含むケチュア語の地名が認められることは確かである。場と人間集団の関係について掘り下げて考えるため, 次にインカ国家の首都であるクスコを事例として取り上げ検討したい。

4 クスコ

クスコは現在のペルー南高地に位置する町であり, かつてインカ国家の首都であった。しかし同時に, スペイン人侵入時, 第 12 代インカ王ワスカルは「クスコ」, そして既に亡くなっていた第 11 代王ワイナ・カパックは「老クスコ (Cuzco viejo)」と呼ばれていた。このことに注目し, ラミーレスはクスコとは本来, 場所ではなく具体的

な人間である王を指し示す概念であり、固有名詞を用いずにインカ王を表す工夫であったと解釈する (Ramírez 2005: 19–20)。そして空間的に固定された町は、インカ王がいる場として同じくクスコと呼ばれるが、あくまで二次的な要素だという。

またグアマン・ポマ・デ・アヤラの記録には、地方の行政センターのいくつかが「もう1つのクスコ」と呼ばれたことが記されている (Guaman Poma de Ayala 1987 [ca. 1615]: 178–179)。さらに現在のペルー中央海岸南部のカニエテ川流域に位置するインカワシ遺跡は、「新クスコ (Cuzco nuevo)」と呼ばれた (シエサ・デ・レオン 1979 [1553]: 263–264)。このように複数の場がクスコと呼ばれることについてラミーレスは、クスコは本来人間であるインカ王を指し、インカ王が立ち寄る場がクスコと呼ばれると解釈する (Ramírez 2005: 22)。敷衍すれば、インカ王としての役割である「クスコ」が先にあり、インカ王 (クスコ) が立ち寄る場としての「クスコ」、「もう1つのクスコ」は二次的であるという。そしてインカ王の移動に伴い国家の中心も移動すると述べる⁸⁾ (Ramírez 2001; 2005)。

同様にステファン・ハウストンとトム・カミンズは、クスコという地理的に固定された場ではなく、インカ王の身体こそがタワテンティンスユの中心であり、クスコは現役のインカ王であったと述べる (Houston and Cummins 2004: 374)。そしてインカ王の身体の移動に伴って、タワテンティンスユの中心も概念上移動したという。

はたしてそうであろうか。特定の人間が世界の中心となることは、必ずしも空間的に固定された場所の欠如を示しているわけではないのではないか。

これまでクスコはケチュア語で「へそ・中心」を意味すると説明されてきた (ガルシラソ・デ・ラ・ベガ 1985 [1609]: 69)。しかし言語学者ロドルフォ・セロン＝パロミノは、クスコをアイマラ語と解釈すると、フクロウの一種を意味すると指摘する (Cerrón-Palomino 2005: 12)。彼はベドロ・サルミエント・デ・ガンボアによる記録の中の「クスコ・グァンカ (cuzco guanca)」 (Sarmiento de Gamboa 1943 [1572]: 57) という表現に注目し、それは「フクロウがとまった岩」を意味し、後に省略化されて単に「クスコ」と呼ばれるようになったと解釈している。クスコの意味を「へそ・中心」と解釈すれば確かにラミーレスの解釈と矛盾しないが、「フクロウがとまった岩」とすれば、クスコは本来、場所と密接に関係している概念であるといえることができる。

考古学者ヒレイン・シルバーマンは、複数のクスコが連続的に建設された可能性を指摘する一方で、現在のクスコの町がインカ国家の首都であることは、物理的規模や建築物の壮麗さなどから明らかであると考え (Ramírez 2005: 243)。確かに、建築

や出土遺物の特徴からクスコに匹敵する遺跡は他に存在しない。インカ王がインカ国家の中心であることに異論はないものの、その一方で、町としてのクスコが首都でありインカ国家の中心であることは考古学者にとって否定できない事実である。即ち、世界の中心は移動可能なインカ王の身体であると同時に、空間的に固定された場、首都クスコでもある。

イアン・ファリングトン⁹⁾は、各地の行政センターが「もう1つのクスコ」と呼ばれたというグアマン・ボマ・デ・アヤラの記述に言及し、もう1つのクスコは首都クスコを物理的に模倣した場ではなく、同じ儀礼的コンセプトが表現された場であると指摘している (Farrington 1998)。彼の解釈に従えば、同じ儀礼を模倣する場であるから、他のセンターはクスコのコピーであり、「もう1つのクスコ」と呼ばれるということになる。筆者も同意見である。

王の身体に注目したラミーレスの論を究極まで推し進めれば、首都クスコはたまたま一番大きい、あるいは一番古いということになる。しかし、場としてのクスコをインカ王の役割としてのクスコに従属させて解釈することは妥当であろうか。社会を人間関係の束として捉えるラミーレスのモデルは、先スペイン期のアンデス社会の特徴を理解する上で、非常に示唆に富んでいる。しかしながら、あまりにも人間中心的にモデルを組み立てており、人間と空間の関係を十分に考慮しておらず、分析が一面的である。

5 リヤクタ

クスコを事例としてインカ王と場の関係を考察してきたが、次に射程を広げ、アンデスにおける人と場の関係性について考えてみたい。手がかりとするのは「リヤクタ⁹⁾ (llacta)」というケチュア語の単語である。

植民地時代初期のケチュア語の辞書ではリヤクタはスペイン語で「町・村」を意味する「プエブロ (pueblo)」という単語に翻訳されている (González Holguín 1989 [1608]: 207, 645; Santo Tomás 1951[1560]: 193, 306)。しかしケチュア語で書かれた記録である『ワロチリ文書』の編者等は、リヤクタは本来、ワカ・祖先、テリトリー、そしてワカを奉じる人々の3つの組み合わせを意味したと解釈する (Salomon and Urioste 1991: 23; Taylor 1999: XXVII)。

リヤクタの根幹となる要素であるワカとはアンデスにおける聖なる存在を意味し、信仰の対象であった。ワカは岩、山、泉などであり、土地と結びつき、空間、場に固定されていた。また先祖の遺体が保管されている洞窟や墓もワカであった。また、あ

る集団の先祖が出てきたとされる特別なワカは「パカリナ (pacarina)」と呼ばれた (アリアーガ 1984 [1621]: 401; ロストウォロフスキ 2003 [1988]; Ramírez 2005)。各リャクタには首長が存在し、ワカ (パカリナ) と人々の間の媒介者として儀礼を執り行ったが、首長自身がワカであるわけではなかった (cf. Ramírez 2005: 144)。

ラミーレスはワカ・祖先、テリトリー、そしてワカを奉じる人々の3つの組み合わせからテリトリーという意味を除外し、リャクタを「ワカとそれを奉ずる人々」と定義している (Ramírez 2005: 53)。しかし先スペイン期アンデスでは土地の所有という考えはないものの、人々が利用するという意味で土地との関わりは常に存在する。境界によって明確に区切られるような面的範囲ではなく、人々が利用している土地の範囲、あるいは人々が信仰するワカの力の及ぶ範囲という意味でテリトリーという言葉を用いれば問題ないであろう。いずれにせよ確かなのは、植民地期にリャクタは「町・村」を意味する「プエブロ (pueblo)」というスペイン語の単語に翻訳され、空間的な区画という意味が前面に出たということである。

先述したようにラミーレスは対人関係に基づいた社会の構成原理を強調し、首長が移動すれば社会の中心も空間的に移動すると解釈する (Ramírez 2001; 2005: 217–234)。しかしながら、リャクタの範囲は人間の動きに伴い変動するが、リャクタの理念上の中心ワカ (パカリナ) は、地理的、空間的に固定されており、人間集団の動きと共に移動するわけではない。社会の中心であるワカが1つの場として空間的に固定されているということは、ラミーレスのモデルと矛盾する点である。

スペイン人による征服後の植民地支配下の16世紀後半に、レドゥクション政策が実施され、キリスト教の布教や納税の効率化のため先住民はそれまでのリャクタから引きはがされ、人工的に区画された集住村へ強制的に移住させられた。しかし先住民インディオは、先祖が出てきたとされるパカリナへ、そして先祖が葬られている旧村リャクタへしばしば戻っていった (アリアーガ 1984 [1621]: 452; 高橋・網野 1997: 181–183)。このことは、首長が移動しても社会の中心がワカであることには変わりがないことを示している¹⁰⁾。

リャクタと同じ構成原理がクスコにも認められるならば、クスコも空間に固定されていると考えることができる。各地に征服に出かけたインカ王のワカは太陽であり、インカ王は「太陽の息子」を名乗った¹¹⁾。インカ国家の首都クスコの設計の中心にはコリカンチャ、即ち太陽の広場があり、それはインカ王のワカである太陽を理念的に示したものである。人間に注目すれば社会の空間的境界は不明瞭で入り組むが、アンデス社会の核であるワカを基準とすれば中心性は明確になる。クスコの中心にあるコ

リカンチャも空間に固定されており、太陽との媒介者であるインカ王が移動したとしても、理念上の核は不動であると考えべきである。

これまでの議論をまとめれば、アンデス社会には明確な線で区切れるような領域はないが、その中心にはワカがあり、空間的に固定されているといえる。ところが、領域、境界の欠如という点については、研究者の間で了解が得られているわけではない。先スペイン期アンデスにおける空間認識をさらに踏み込んで理解するため、次にスペイン人がモホンと総称した一連の物体を取り上げ、検討したい。

6 モホン

オリビア・ハリスは、アンデス社会の構成原理は人間関係であることを認めつつも、先スペイン期アンデスにおいて、設定された境界が存在しなかったとは考えてはならない、と述べている (Harris 1997: 364)。ペルシネンは、アンデスにおける政治システムの基盤としては、人間が一義的であり、土地は二義的であったことを認めつつも、ハリスと同様に、土地が区画されていたと主張する (Pärssinen 2005: 234)。こうした空間の区切り、土地の境界がなかったという解釈に異議を唱える研究者が論拠として挙げるのは、スペイン人がモホンと称した物体の存在である。モホンはスペイン語で「区画、境界、道を分けるために置かれる印 (La señal que se pone para dividir los terminos, lindes y caminos)」(Real Academia Española 2002 [1726]) を意味する単語であり、それらはインカ王によって設置されたと植民地時代の記録に記されている。

これに対して、ラミーレスは領域という概念を再考する一連の分析の中で、モホンを取り上げ再検討している。確かにそれは植民地時代には土地の境界を意味するが、同時に先スペイン期から存在した、1) ある人物や事件を記念するためのモニュメントや場、2) 気候の変化を示す徴 (高地から低地に下りる場合)、3) 仕事を割り振るマーク、4) 人々が積み上げた石の山であるアパチタ (apachita, 聖なる場)、などの物体を指して用いられたのではないかという (Ramírez 2001: 187)。

土地の境界は 1532 年以降に明示され、定義されたのであり、それを示すために利用された物体がモホンと呼ばれた、とラミーレスは主張する。換言すれば植民地期に土地の境界として利用されたモホンの多くは、先スペイン期には境界として設置されたものではなかったと考えている (Ramírez 2005: 55)。彼女の考えによれば、先スペイン期のアンデス世界に存在した様々な物体が、植民地時代にその意味の違いが認識

されず、一緒くたにモホンと呼ばれ、本来土地の境界を含意していなかったものが、植民地時代に再解釈されたということになる。確かに植民地時代のクロニカにはインカによってモホンが設置されたことが記されているが、それらの物体が先スペイン期に土地の境界を意味していたかどうかは明らかではない。

これまでモホンは考古学的に遺構として同定されていないが、グアマン・ポマ・デ・アヤラの絵（図5）や、マルティン・デ・ムルーアの図（図6）には、塔のような形をした物体として描かれている。

スペイン語のモホンに対応するケチュア語の単語の1つは「サイワ（sayhua）」で



図5 モホン（サイワ；Guaman Poma de Ayala 1987 [ca. 1615]）

あり (González Holguín 1989 [1608]: 325, 591), 図5, 図6にも記されている。ラミーレスはモホンの一部が石を積み上げた道しるべであるアパチャを指していると主張するが, 確かにムルーアの絵ではサイワとアパチャは類似している (図7)。また, ハリスは, モホンが祖先と同一視され, 信仰の対象となると述べている (Harris 1997: 365; cf. 熊井 2000: 26-27)。つまりモホンの一部がワカと同一の属性を備える, 逆に言えばワカの一部がモホンと呼ばれたということである。従って, スペイン語のモホンに対応するケチュア語の単語は, サイワ, アパチャ, ワカなど複数存在するといえる。

また, サルミエント・デ・ガンボアによる記録の中に「所有のモホン (mojón de

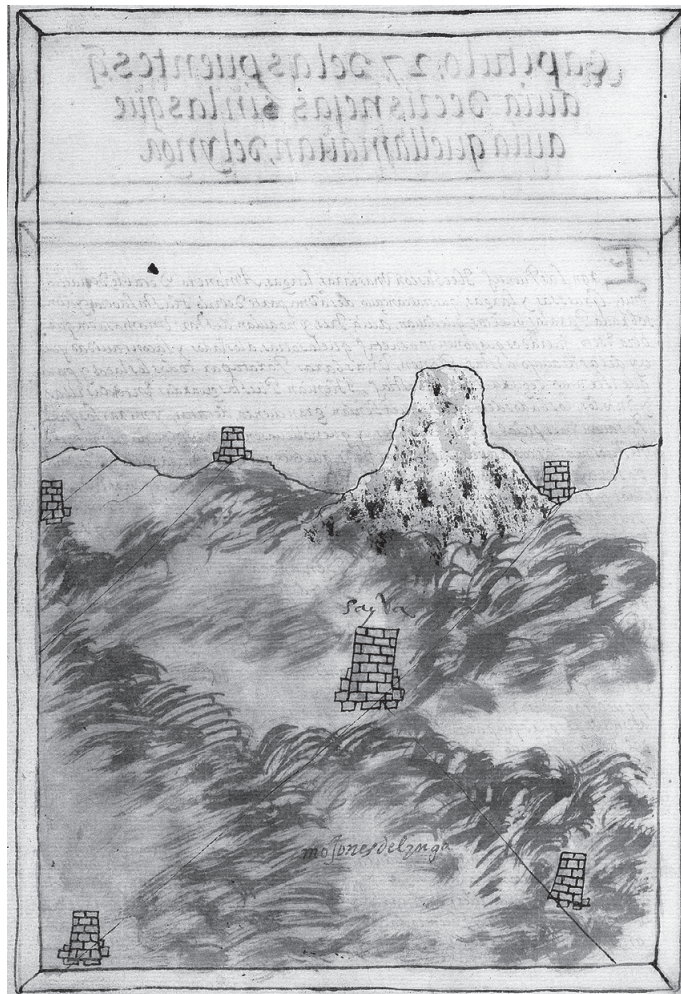


図6 モホン (サイワ; Murúa 2004 [ca. 1590])

posesión)」がクスコと呼ばれたという記述があるが (Sarmiento de Gamboa 1943 [1572]: 57), クスコは当然中心であるから, モホンは境界性を意味してはいない。

モホンは確かに空間的に固定されており, 少なくとも人々の活動の場所性を表すことは明らかであるが, 空間の境界を示したという解釈の根拠は曖昧である。

これまで先スペイン期のアンデスにおいて我々が用いるような地図が存在した証拠は確認されておらず, 地図は植民地時代にスペイン人によって持ち込まれたものである。先スペイン期アンデスの人々の空間認識では, 空間は境界で区切られた面としてではなく, 点と点の関係性として捉えられ, 点と点の間の方向, 相対的な距離だけが

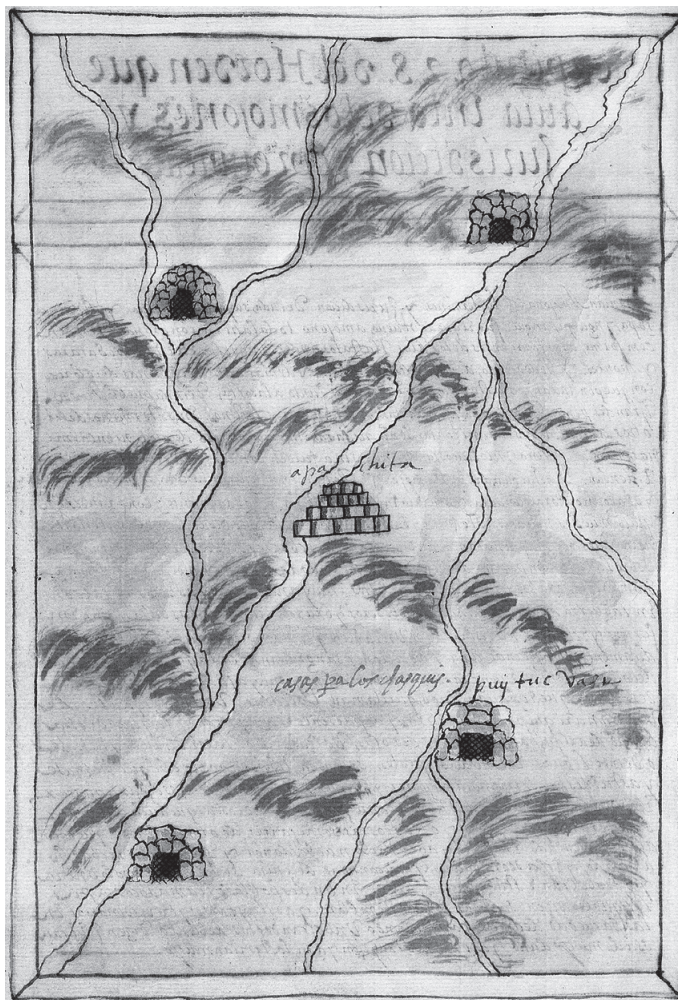


図7 アパチタ (Murúa 2004 [ca. 1590])

認識された。換言すれば、アンデスの民の頭の中にあったのは、点と点を結ぶトポロジカル・マップであり、トポグラフィック・マップではなかった (cf. Harris 1997: 367)。そして、スペイン人が植民地時代に既存の印をモホン (境界) として再解釈し、あるいは新たにモホンを設置した行為は、トポロジカル・マップからトポグラフィック・マップへの変換作業であったといえる。

基準点から各方向に最も離れた場所にあるモホンをそれぞれ線で結べば、結果的に空間的境界に近似するであろう。しかし、ある基準点との関係でモホンが設定されるとしても、モホン同士の横の繋がりには明確ではなく¹²⁾、モホン自体が空間の分断を示すわけではないのである。このことは、人々の集合が社会の範囲であり、その空間的境界が曖昧であることと平行関係にある。

7 移動するインカ王

ここまでアンデス社会の人間中心性、空間的境界の不明瞭性、そして中心の空間的固定性という特徴を指摘した。人ではなく空間に固定されたワカがリヤクタの中心にあり、指導者である首長は、ワカと人々の間の媒介者として、その役割を担うことができる。インカ国家の場合も首都クスコが先にあり、それを体現するインカ王クスコは二次的である。そして「もう1つのクスコ」と呼ばれた各地の行政センターは、首都クスコのコピーであり、延長なのである。

次に考えたいのは、インカ王がクスコに留まらず地方を移動することが多かったという点についてである。その目的は、大きく2つに分けることができる。1つは征服活動であり、もう1つは征服した人々を訪ねる巡歴である。

まず征服活動について考えてみたい。インカ国家が征服、拡大を開始し、それを継続した背景についてはこれまで様々な研究者が説明を試みてきた。ジェフリー・コンラッドとアーサー・デマレストは「分割相続 (split heritage)」の結果、インカ国家は必然的に外部へ拡大することになったと説明する (Conrad and Demarest 1984)。分割相続とは、新しく即位した王が前王の財産を相続できないというインカ国家の制度を指して用いられている。ロストウォロフスキはその解釈に異を唱え、臣下との互酬関係によって雪だるま式に増大する要求を満たすために土地や物質的資源を求めた結果、インカ王が各地に征服活動に出かけ、インカ国家が拡大することになったと考える (ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 59)。一方ラミーレスは、物質的富ではなく労

働力の確保こそがその目的であったと主張する (Ramírez 2005: 8–9)。各々の説明は異なっているが、こうした説明の基本にあるのは、富を求めるインカ王の姿である。では一体、インカ国家においては戦争にどのような意味が付与されていたのであろうか。

ラミーレスは、インカ国家の拡大は信仰によって是認され、戦争に勝つことがワカの恩恵を確認する方法の1つであったと述べる¹³⁾ (Ramírez 2005: 112)。そのため、ワカである太陽の息子のインカ王は征服活動を絶え間なく続けた。つまりインカ国家においては、戦争自体が儀礼的に意味づけられていたといえる。また、パチャクティ、トパ・インカ、ワイナ・カパックという歴代インカ王は、戦争を部下に命令したのではなく、自ら指揮を執って戦争・征服を実施した¹⁴⁾。王の移動の理由をインカ王の戦士としての属性に注目すれば、イデオロギーや儀礼は、戦争・征服という行為の正当性を演出するために存在したといえる。インカ国家においては儀礼と政治（戦争・征服）は密接に絡み合っており、儀礼の隠れ蓑を利用し、政治的活動を行うインカ王の姿を映し出すこともできるし、征服活動によって儀礼が活性化、正当化されるという側面を指摘することもできる。

次にインカ王による巡歴について考えてみたい。

インカ王は即位と同時にパナカと呼ばれる親族集団を創設し、パナカの成員は王の死後も継続し、インカ王のミイラ、畑、建物などの財産を管理した。このパナカが管理する財産を、新しく即位したインカ王が相続することはできなかった (シエサ・デ・レオン 1979 [1553]: 59; ピサロ 1984 [1571]: 76–77)。パナカはクスコ周辺にインカ国家の崩壊後の植民地時代まで存続していた。過去のすでに死亡したインカ王と特権的な関係を結んだ特定の間人集団であるパナカは固定され、新しいインカ王は支配関係を結ぶことができなかった¹⁵⁾。また、パナカと同様に、死亡したインカ王と永続的な関係を結んだ集団がクスコの外側に存在したのか、存在したとすればその規模はどのくらいか、という点についてはよく分からない。

死後のインカ王との関係を固定したパナカ集団とは異なり、現役の王の間人関係は一時的であり変動する余地がある。インカ王は征服後も各地の臣民を訪問し、巡歴といえる行為を行っていた (cf. シエサ・デ・レオン 1979 [1553]: 99–105)。各地の民族集団の支配が確立されていなかったため、反乱を起こした集団を再び制圧する必要がある場合もある。しかし新たに即位したインカ王は、平穏無事な地域にも赴き、新たに支配関係を構築する必要があった (Ramírez 2005: 223)。それは新王は、前王が

築いた富や支配関係を結んだ人間を相続することができず、即位と共に関係はリセットされ、支配関係は結び直されたためである¹⁶⁾。つまり、各民族集団はインカ国家という組織ではなく、各インカ王と関係を結んだのであり、そして一旦関係が結ばれた後にもそれが再確認されることによって支配体制が維持されたのである¹⁷⁾。インカ王が首都クスコを離れ巡歴を行ったことは、統治体制が安定していたことを示すとも解釈できるが、逆説的に捉えれば、それだけのことをしなければ維持できないほどインカ王権の基盤、そしてそれを支えるシステムが脆弱であったともいえる¹⁸⁾。

熊井茂行はインカ王による国内巡歴が、「モホンの再確認」と「モホンによって境界を画定される（民族）集団の首長たちとの社会関係の再確認」を伴うと述べる¹⁹⁾（熊井 2000: 36）。インカ王によって再確認されるモホンが、先代の王が立てたものか、あるいは自ら設置したものかは明らかではない。しかし、インカ王は王朝の始祖マンコ・カパックまで遡って、自分の系譜を語ることをせず、前王との関係を強調することもない。またムルーアは第 11 代王トパ・インカ・ユパンキがすでに設置されていたモホンを取り除き、新たに据えたことを述べている（Murúa 2004 [ca. 1590]: fol. 80r）。こうしたことから前王の設置したモホンではなく、自ら新たに設置したモホンを再確認したと解釈する方が整合性が高いと筆者は考えている。

歴代インカ王は各地に巡歴を行い（熊井 2000; Pease 1992: 109–112）、設置された行政センターに立ち寄り儀礼を行い、各地の民族集団と関係を構築した（Ramírez 2005: 111）。ラミーレスは、インカ王こそが宇宙の中心であるから、王が移動し、入場した各地の行政センターが中心になり、そして場ではなく人間こそが権力の基盤であったと述べる（Ramírez 2005: 55–56）。インカ王の身体が組み込まれた場がクスコを再現し、活性化するという見解は、ハウストンとカミンズも示している（Houston and Cummins 2004: 374）。

戦争・征服活動や巡歴の際には、全土に張り巡らされた道路網、その道の上に設置された行政センターが利用された。インカ国家における地方支配を理解するためには、これがどのような性格の施設であったのかを考える必要がある。

ワヌコ・パンパの調査を実施したクレイグ・モーリス等は、インカ国家における地方支配の拠点である行政センターが、我々が想像する都市のようなものであったのかと問うている（Morris and Thompson 1985: 96）。スペイン人がやってきたとき、行政センターに存在する数多くの建物、物資、人々を目にして、ヨーロッパの都市を思い浮かべた。そしてそれらをできるだけ再利用して、新たな町作りを試みた。しかしす

ぐにヨーロッパ人が住むために適した設計になっていないことに気がつき、行政センターが町として利用されることはなかったのである（Murra 2002 [1999]: 82）。一般にインカの行政センターはそのまま放置されたか、徹底的に破壊され新たな町の下に埋め込まれたかのいずれかである。

行政センターは大量の人間が常に待機する、あるいは恒常的に生活する場ではなく、その施設は一時的に利用されたのみであったと考えられる。また、兵士は行政センターの内部に宿泊したのではなく、テントを持って移動したようだ（無名征服者 1966 [1534]: 485）。ラミーレスは、行政センターを祭祀センター、儀礼を執り行う場と捉えているが、それは同時に戦争時の補給センターであり、また人々が働く場でもあった。喩えていえば、行政センターは会社と倉庫と儀礼会場の機能を備えた施設であった。

以上インカの地方支配について考察するために重要な情報を整理した。次に具体的な事例を基に、インカによる征服に伴い地方においてどのような変化が生じたのかを検討する。

8 インカの地方支配——ペルー北部高地カハマルカ地方の事例

インカ国家内部には多くの民族集団が存在した。アメリカ人研究者の故ジョン・H・ロウはクロニカの記録を基にそうした民族集団の分布を地図上に図示した（図4）。これまでの議論をふまえれば、各地の民族集団間の境界は線で引けず、互いに入り組む。しかし、民族集団の大まかな分布、中心地を把握するのには有効であり、十分な図である。

民族集団は大まかにインカ国家の行政単位に対応するが、これらの民族集団はインカ国家とどのような関係にあったのか、またインカ国家の征服下でどのような変化を被ったのであろうか。インカ国家における地方支配の実態について、ペルー北部高地カハマルカ地方を事例として論じていきたい。

8.1 史料から再構成するカハマルカ地方

アンデスの他の地域と同様にインカ期カハマルカ地方については、歴史史料に基づく研究がリードし、考古学データを用いた研究は遅れてきた。ここではまずインカ期カハマルカ地方に関する史料の情報をまとめ、その後考古学データを基に、史料に記述された内容を検討する。歴史史料の情報を考古学データによって検証する手法はイ

インカ研究においてスタンダードな方法であるが、データ処理の段階で質の異なった情報を混同すべきではない。歴史史料の検討から復元できるモデルと、考古学データを基に抽出されるモデルを相互に照らし合わせて、解釈の整合性を高めるという手続きを踏む必要がある。

現在のカハマルカの町の下にはインカの行政センターが埋まっており、そこはフランシスコ・ピサロ率いるスペイン軍がインカ王アタワルパを捕縛した場所として世界的に知られている。では一体インカによる征服以前にどのような社会があり、征服後どのような変化を蒙ったのであろうか。

カハマルカ地方に関する情報を含む様々なジャンルの史料があるが、しばしば取り上げられるのはサルミエント・デ・ガンボアが記したクロニカである (Sarmiento de Gamboa 1943 [1572]: 108)。それによれば、グスマンゴ・カパックという人物がチムー・カパックと同盟しインカ軍と戦ったが、敗北しその軍門に下ったという。カパックとはインカ族の間でインカ王を示すのに用いられた称号である²⁰⁾。チムーとはペルー北海岸に栄えた国家の名前であり、一方、グスマンゴは現在カハマルカ県コントゥマサー郡にある地名である。従ってグスマンゴ・カパックは、インカがやってきたときにカハマルカ地方を治めていた指導者と考えられ、チムー国家のリーダーであるチムー・カパックと同盟していたことから相当な権力を有していたことが史料からは伺える。そして同様の情報はミゲル・カベージョ・バルボアが残したクロニカにも含まれている (Cabello Valboa 1951 [1586]: 317)。チムー国家はインカに征服された社会の中では最大規模の社会であり、インカ国家によるチムー国家の征服はいわば、インカの拡大過程におけるハイライトといえる事件であった。ではチムー国家と同盟したグスマンゴ・カパックが支配していたのは一体どのような社会であったのか。

インカ期のカハマルカ地方の状況について、クロニカとは性格の異なる巡察記録という史料を基に検討してみたい。16世紀スペイン植民地支配下において、納税人口を把握するため「ビシータ (visita)」と呼ばれる巡察が行われた。現在の国勢調査のようなものであり、家族構成や名前に至るまで詳細な内容が含まれており、当時の状況を再構成する有力な情報源となっている。カハマルカ地方では1540年、1567年、1571–1572年、1578年に実施された巡察の記録が発見されている²¹⁾ (Espinoza Soriano 1986 [1967]; Rostworowski and Remy 1992 [1571–1572/1578])。

植民地支配下において徴税の効率化のため、インカ期の政治組織が温存された。そのため植民地時代の記録からインカ期の状況を復元することができる。巡察記録によれば、インカ期カハマルカ地方にあったグアマニは7つのワランガから構成されてい

た。ワランガとはケチュア語で 1000 を表し、納税の対象となる成人男性の人口を数える単位であり、女性や子供、老人は含まれなかった。カハマルカ地方には、グスマンゴ、チュキマンゴ、チョンダル、バンバマルカ、カハマルカ、ポママルカ、ミティマの 7 つのワランガが存在し、その中のワランガ・グスマンゴの首長が全体の筆頭首長であった。

ペルーの歴史学者ワルデマル・エスピノサ・ソリアーノは、こうした情報を総合し、サルミエント・デ・ガンボアの記録に現れるグスマンゴ・カパックと 7 つのワランガの筆頭首長を同一人物とみなし、カハマルカ地方にはインカの征服以前に、7 つのワランガに近似したまとまりである「旧カハマルカ王国」があり、それがインカに征服され、支配下に組み込まれたと解釈した (Espinoza Soriano 1986 [1967]: 349)。また、「旧カハマルカ王国」を、筆頭首長のワランガの名前から、「クイスマンク王国」とも呼んでいる。グスマンゴは、クイスマンクがスペイン語化した発音である。

エスピノサ・ソリアーノは、先インカ期からインカ期にかけての流れを連続的に捉えている。逆に言えば史料からインカ期の状況を再構成し、そこから遡及的に先インカ期の状況を復元している。それでははたして史料の記述を基に復元された先インカ期の状況は、考古学データと合致するのか、あるいは齟齬を来すのであろうか。

史料の内容と考古学データを付き合わせるため、まず 7 つのワランガの地理的分布を考えてみたい。1540 年の巡察では、巡察使は各地を回ったのではなく、各首長をチケレテという村に招集し、各首長の自己申告によって納税人口を記録した。そのため各ワランガの地理的分布は分からない。各ワランガの地理的分布を把握する手がかりとなるのは 1571–1572 年、1578 年に行われた巡察記録である。巡察使は各村を訪れ、各村でワランガ別に成員を記録したため、各ワランガの成員がどの村にどれだけ生活していたかを復元できる。

ただし 1570 年代のワランガの地理的分布が、インカ期のワランガの分布をそのまま反映しているわけではない。というのは 1565 年にレドゥクションと呼ばれる先住民の集住化政策が実施され、それまで 500 以上あったリャクタの先住民は 43 の集住村にまとめられたためである (Ramírez 2002: 33)。巡察使が訪れたのはこの集住村であり、それらはインカ期から連続的に存続しているわけではない。しかし先住民がそれまで生活していた各リャクタから付近の集住村に引き込まれたと想定すれば、1570 年代の巡察記録から、インカ期の 7 つのワランガの大まかな分布を復元することができる。

先に述べたように、アンデス社会の境界を線で引くことはできず、社会間で境界は

ンガの人間は少ないという傾向が認められる。

筆者は7つのワランガの範囲内で先インカ期に土器、建築などの特徴に等質性が認められるか、あるいは内部に異質性が認められるのかを確認するため、アンデス山脈の西斜面と、東側のそれぞれの地域でインカ期直前の時期に比定され、かつ大規模な遺跡を選定し、発掘調査を実施した。発掘データを比較することによって、エスピノサ・ソリアーノが主張する「カハマルカ王国（クイスマンク王国）」の存在が物質的証拠から支持できるか、つまり先インカ期からインカ期にかけて連続性はあるのか、あるいは大きな変化が生じているのかを検討したい。

発掘対象として選定したのはアンデス山脈の西斜面に位置するタンタリカ遺跡と、東側のカハマルカ盆地に位置するサンタ・デリア遺跡である（図8）。前者はインカ期のワランガ・チュキマンゴ、後者はワランガ・カハマルカ、もしくはワランガ・ボママルカの地理的範囲内に位置する。2つの大遺跡が7つのワランガの想定される地理的分布範囲内に位置し、かつ地理的に離れているということを確認しておきたい。

8.2 サンタ・デリア遺跡の発掘

サンタ・デリアはアンデス東斜面カハマルカ盆地に位置するカハマルカ文化の遺跡である。カハマルカ盆地には紀元前50年頃からスペイン人によってアタワルパが捕縛された。1532年までカハマルカ文化が繁栄した。カハマルカ文化はカオリンという白色の粘土を用いた土器製作によって特徴付けられる。カオリン土器はスペイン人侵入時までの約1600年に亘って連続的に製作され、その特徴に基づきカハマルカ文化は早期、前期、中期、後期、晩期の5時期に区分されている（Terada and Matsumoto 1985）。また、カハマルカ盆地ではカオリン製の匙が製作され、カオリン土器と文様を共有していることから、両者はセットで使用されたと考えられる。

サンタ・デリア遺跡はこれまで複数の研究者によって、表面観察および表面採集土器の特徴から、カハマルカ晩期（A.D. 1200–1532）に時期比定されてきた。例えばダニエル・ジュリアンはカハマルカ晩期の大規模遺跡として、後述するタンタリカ遺跡とともにサンタ・デリア遺跡を挙げている（Julien 1993）。

サンタ・デリア遺跡は標高約3000mの場所に位置し、40haもの広がりをもつ。3つの丘で頂上部から麓まで遺構が確認できるが、建築物は約20haの中核部に集中している（図9）。発掘に当たっては丘の1つを選定し表面観察を行い、建築の設計、改修プロセスを把握するという方針で、A、B、Cの3つの発掘区を設定した。調査の結果、複雑な建築プロセスを明らかにし、建築に伴う土器をはじめとする多くの遺

物を収集し、10基以上の墓・埋葬を確認することができた。

大量の出土土器は、カオリン土器と、カオリンではない粘土を用いた非カオリン土器に大別される。前者の方が数は少ないが、時期によって文様の特徴が明確に変化するるので時期指標として適している。サンタ・デリア遺跡はカオリン土器の特徴に基づきカハマルカ晩期に属することが確認された。この時期には Amoshulca Complex と Cajamarca Black-on-Orange の2つのタイプのカオリン土器が製作された。そして後者の製作時期が遅い可能性、より踏み込んで言えば、インカ期（A.D. 1450–1532）に製作が開始された可能性がある。

Amoshulca Complex は低い高台付き碗が主流で、器の内と外の両面に白色のスリッ

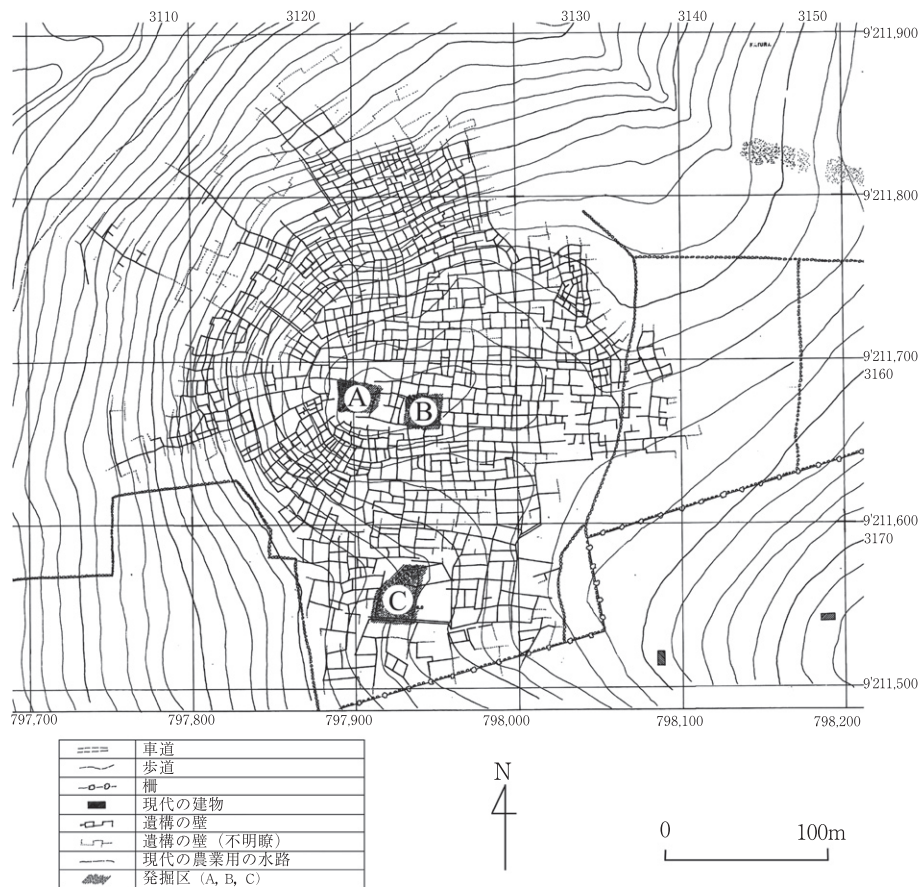


図9 サンタ・デリア遺跡の図面

ブが施され、その上に黒色系、赤色系の2色を用いて文様が描かれる（図10）。Amoshulca Complex はカハマルカ盆地一帯に広まっており、北はバンバマルカまで確認されている（Terada and Matsumoto 1985）。

Cajamarca Black-on-Orange はオレンジ色のスリップを施してその上に黒い線で幾何学文様を描くのが特徴である（図11）。出土数は少ないが、丸底碗や円筒形などの器

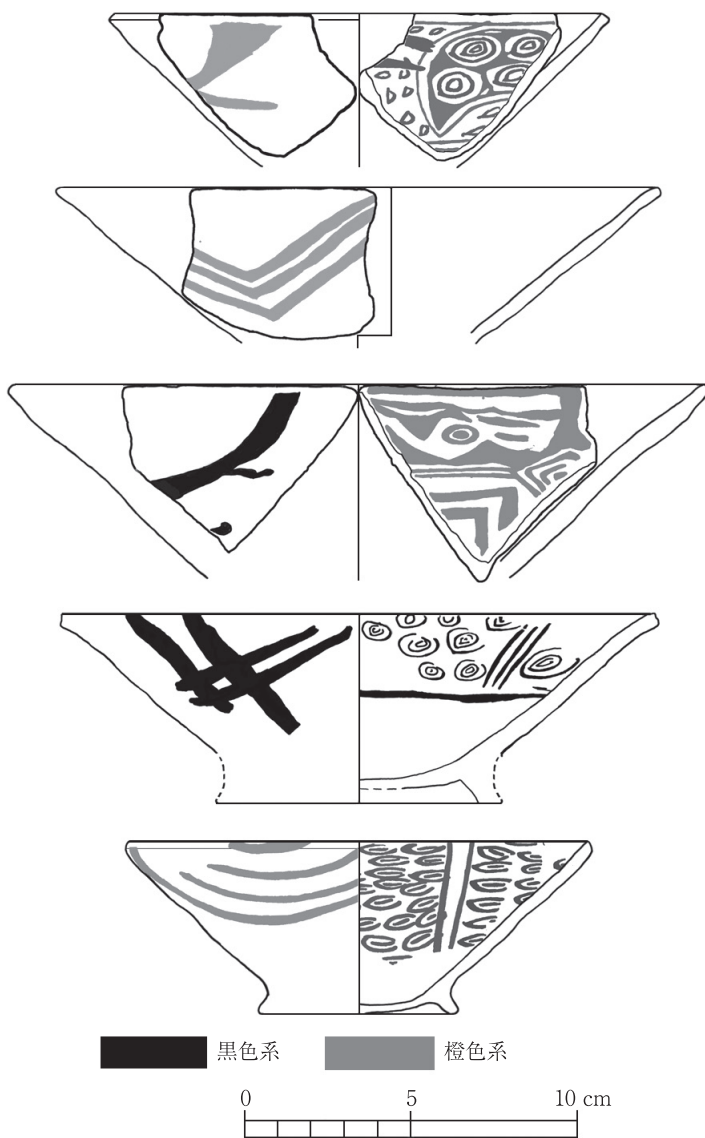


図10 Amoshulca Complex（サンタ・デリア遺跡出土）

形が確認されている。

カオリン土器のような目立った特徴を有する土器を分析するだけでなく、土器全体の傾向を押さえることによって各時期の細かい特徴、地域差を把握することができる。サンタ・デリア遺跡の出土土器について、筆者は非カオリン土器についてもタイプ分類を行い、Cajamarca Coarse Red, Cajamarca Brown Slipped, Cajamarca Porous Brown, Cajamarca Black Polished, Cajamarca Brown Polished, Cajamarca Kaolin Brown Slipped の6つのタイプを設定した(渡部 2004b)。Cajamarca Coarse Red は時期ごとに多少の違いはあるものの、カハマルカ文化の全時期を通じて連続的に製作された土器であり、また、後述するタンタリカ遺跡の出土土器中の Tantarica Red Smoothed と高い類似性を示す。大型の壺が代表的な器形であり、穴のあいた皿なども製作された。非カオリン土器は装飾をあまり伴わないが、Cajamarca Black Polished, Cajamarca Brown Polished の碗などには、人面や猫科動物の顔が立体的に表現された例がある。

現在のところサンタ・デリア遺跡は大規模な発掘調査が実施された唯一のカハマルカ晩期の遺跡である。比較対象となりうる資料がないため、サンタ・デリア遺跡の出土土器がカハマルカ晩期の一般的傾向を示すかどうかは不明である。

これまでのカハマルカ文化研究は土器に重点が置かれ、建築についてまとまった研究はなされていない。それはカハマルカ文化の建築の壁が一般に割石を用いて簡素に

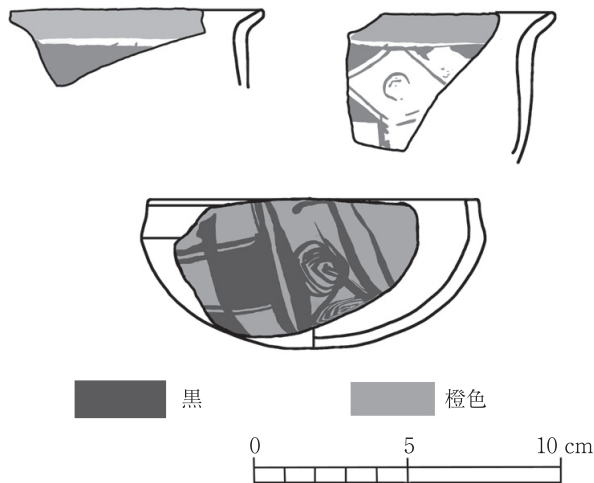


図 11 Cajamarca Black-on-Orange (サンタ・デリア遺跡出土)

作られており、建築物が目立った特徴を有さないことに一因がある。他の遺跡の建築と同様にサンタ・デリア遺跡の建築もあまり保存状態は良くなく、表面観察のみではその構造を明確に把握することはできない。

発掘の結果、壁の基礎部分が検出されたが、壁の基礎は地中深く埋め込まれておらず、非常に粗く簡素な作りであった。そして建物の大部分は一辺が約4～5mの方形の部屋状構造であり、小規模な改修が繰り返されていることが確認された（図12）。つまり綿密な設計に従って建設されたというよりも、小規模な建物が長期間に亘って連続的に建設された結果、サンタ・デリア遺跡は40haという広がりを持つようになったと考えられる。

サンタ・デリア遺跡の建築の特筆すべき特徴の1つは、多くの部屋状構造の床下に確認された地下式の空間である。内部に何も確認できない場合が多かったが、人骨と副葬品を伴う墓が2基検出されたことから、各部屋の床下の空間は墓室として利用されたと解釈してよいであろう（図13、図14）。

C区第3号墓（CTM3）では頭骨が1点と大腿骨、上腕骨などが確認できたが全てバラバラで明らかに二次埋葬であった（図13）。また、副葬品として土器5点が確認されている。丸底の碗が2点、高台付の皿が1点の他に、口縁部が欠けた壺の上に小

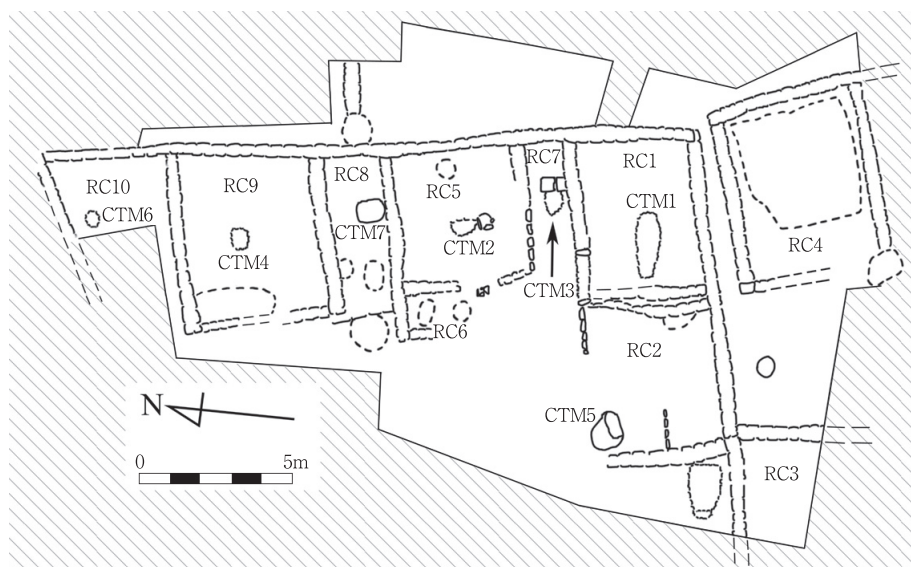


図12 サンタ・デリア遺跡C区の建築の平面図
RCは部屋状構造の番号、CTMは墓の番号

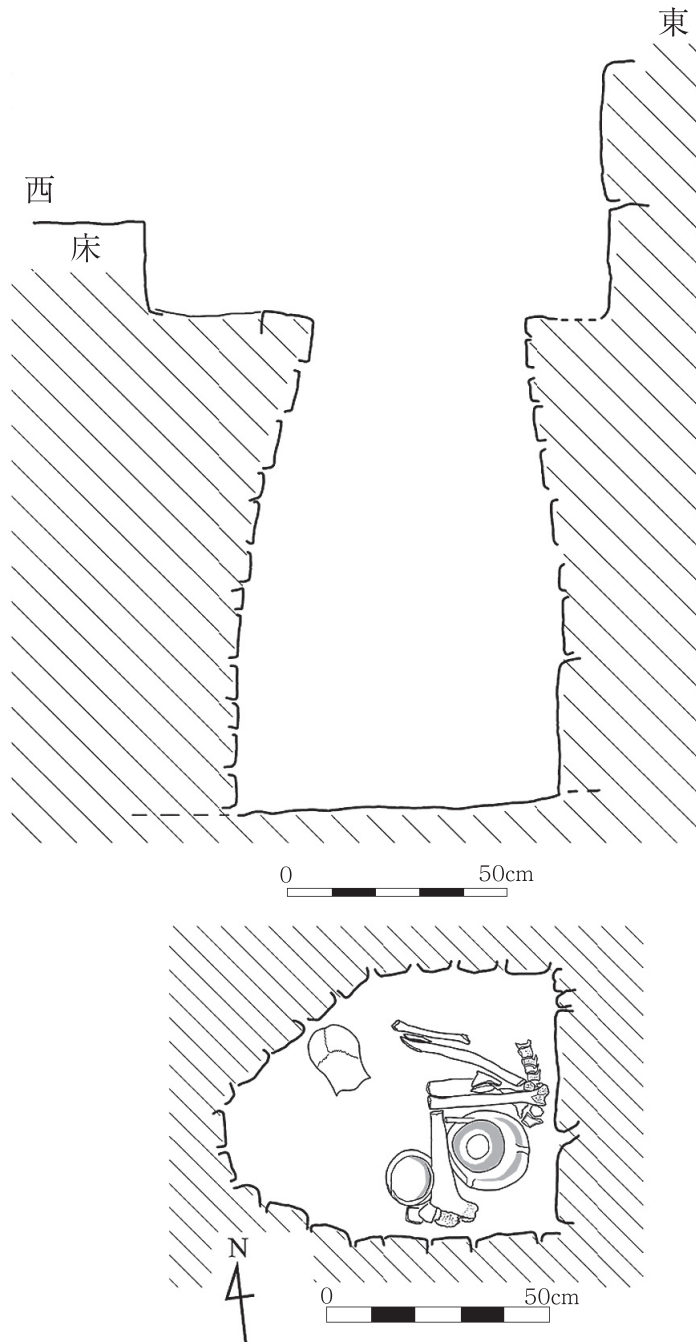


図 13 サンタ・デリア遺跡の墓 CTM3
上：墓室断面図，下：平面図

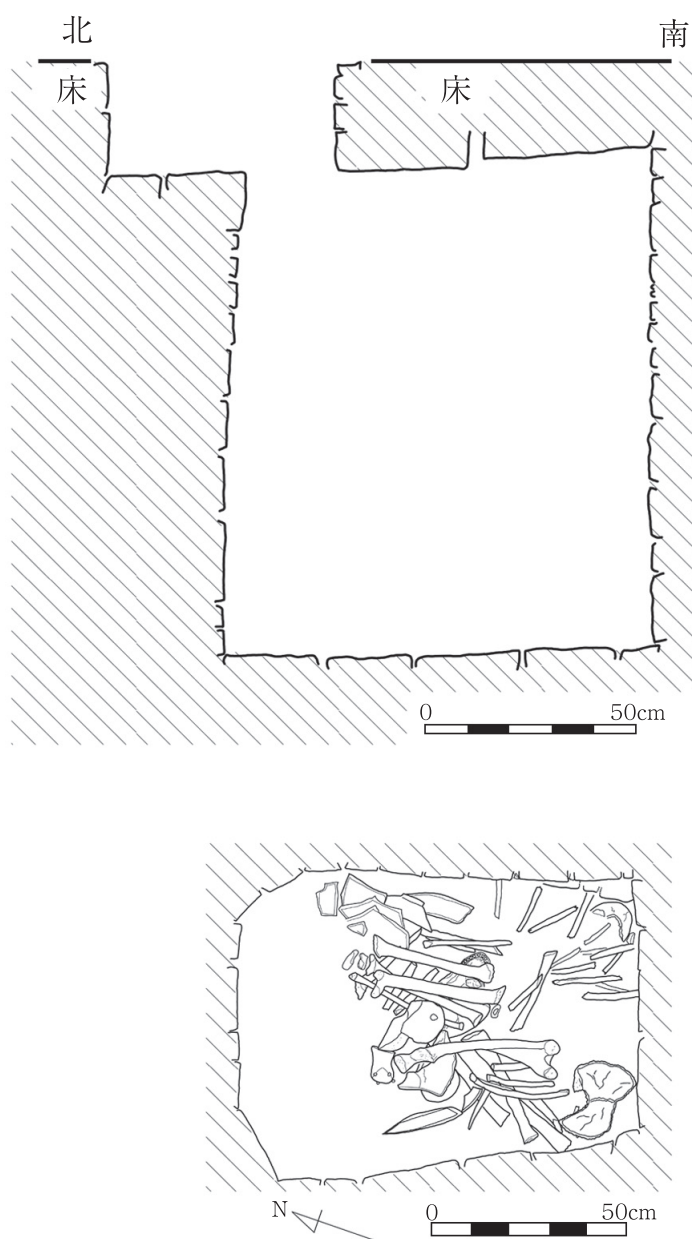


図 14 サンタ・デリア遺跡の墓 CTM4
上：墓室断面図，下：平面図

型の丸底の碗が蓋として置かれていた。

C区第4号墓(CTM4)では、頭骨3点以外に大腿骨や上腕骨など大きめの骨がそろっている状態で確認された(図14)。内部から大型の土器片が多く出土したが、それらを接合したところ、Cajamarca Brown Slippedの高さ60cmの瓶であることが判明した。出土状況から判断すると、土器の中に人骨が置かれ、その後土器が壊れたと考えられる。それ以外に把手付き壺1点、動物象形土器1点が副葬品として確認された。

これらの2つの地下式の墓では全身骨格がそろっておらず骨はオリジナルな位置を保っていなかった。つまり遺体をそのまま安置する一次埋葬ではなく、土に埋めるなどの方法によっていったん遺体を骨だけにして、骨を取り出し別の場所に安置する二次埋葬である。またサンタ・デリア遺跡では、地下式墓室ではない他の場所でも二次埋葬が確認されていることから、カハマルカ晩期には二次埋葬が一般的な埋葬形態であったと考えられる。しかしカハマルカ文化の他の時期の埋葬形態については殆ど何も分かっていないため、二次埋葬の習慣がいつから始まったかは不明である。

興味深いことに、墓の副葬品として確認されたのは文様のない土器が殆どで、カオリン製の装飾土器はなかった。通常装飾土器は墓や埋納などの特別な場で用いられることが多い。しかしカハマルカ文化のカオリン土器は墓以外の住居址などのコンテクストで出土する。また少なくともサンタ・デリア遺跡では、装飾を伴うカオリン土器は墓では用いられないという逆の傾向が認められる。この傾向が同時期の他の遺跡やカハマルカ晩期よりも前の時期に認められるかどうかは、今後発掘データを増やして検証する必要がある。

これまでカハマルカ晩期にはA.D. 1200–1532という年代が与えられてきた(Matsumoto 1993)。サンタ・デリア遺跡の出土遺物の放射性炭素年代測定値は、カハマルカ晩期の範囲内におさまるが、インカ期(A.D. 1450–1532)よりも古い年代を示した(表1)。インカ様式の土器などインカ期に利用された証拠も確認されていないため、サンタ・デリア遺跡はインカ期には放棄されていた可能性が高い。

では一体、インカ期にカハマルカ盆地にはどのような変化が生じたのであろうか。インカ様式の土器や建築が直接的な手がかりとなる考古学データである。カハマルカ盆地には新たにインカ道が敷かれ、支配のための行政センターが設けられた。現在のカハマルカの町の下にはインカ期の行政センターが埋まっており、突貫工事があるときには必ずといってインカ様式の土器が出土する。ところがこれまでカハマルカ盆地

において実施された遺跡分布調査では、インカ様式の土器や建築が確認できた遺跡は非常に少ない。1947–1948 年にカハマルカ盆地で調査を実施したフランス人のレシュレン夫妻は 93 遺跡を登録したが、その中でインカの遺跡はたった 3 遺跡であり、全てインカ道上、あるいはその周辺に位置している (Reichlen and Reichlen 1949)。1983–1984 年にカハマルカ盆地で調査を実施したダニエル・ジュリアンは 115 遺跡を登録したが、そのうちカハマルカ晩期の遺跡は 48、インカ期の遺跡は 3 つであった (Julien 1988)。2001–2003 年にカハマルカ盆地で遺跡分布調査を実施した関雄二等は、計 247 遺跡を登録し、うち 48 遺跡がカハマルカ晩期のものであった。しかしインカ様式の土器を収集できたのは 4 遺跡のみであった (Seki and Tejada 2003; Seki and Ugaz 2002; Seki et al. 2001)。また筆者の知る限り、在地のカハマルカ様式とインカ様式の特徴が融合した土器も確認されていない。インカ期に急激に遺跡数が減るということは想定しにくいいため、インカ国家の支配下においても既存の土器製作伝統に変化は生じなかったと考えられる。つまり、インカ期にカハマルカ盆地では土器の特徴が大きく変化することなく、Amoshulca Complex が引き続き製作され続けたのであろう (Terada and Matsumoto 1985)。

表 1：サンタ・デリア遺跡出土遺物の ^{14}C 年代値

測定機 関番号	^{14}C BP	$\delta^{13}\text{C}$	Cal AD (1 σ)	Cal AD (2 σ)	登録番号	資料 出土コンテキスト
TKa-13137	740 $\pm$ 100	-15.0	1260–1327 AD(34.3%) 1340–1390 AD(24.8%)	1054–1061 AD(0.4%) 1150–1435 AD(95.0%)	01SD-A-C8	炭 A 区第 2 号墓内
TKa-13138	630 $\pm$ 60	-9.4	1310–1360 AD(40.6%) 1379–1414 AD(27.6%)	1290–1435 AD(95.4%)	01SD-A-S2	炭化物 A 区第 2 号墓内
TKa-13139	590 $\pm$ 70	-9.6	1320–1351 AD(22.3%) 1385–1440 AD(45.9%)	1291–1456 AD(95.4%)	01SD-A-S5	炭化物 A 区部屋 A6 の炉
TKa-13140	700 $\pm$ 80	-8.9	1284–1329 AD(30.4%) 1335–1391 AD(37.8%)	1223–1422 AD(95.4%)	01SD-A-S8	炭化物 A 区部屋 A6
TKa-13141	710 $\pm$ 110	-8.0	1235–1242 AD(2.4%) 1265–1403 AD(65.8%)	1151–1452 AD(95.4%)	01SD-A-S10	炭化物 A 区部屋 A2 の炉
TKa-13142	810 $\pm$ 100	-24.4	1162–1312 AD(62.1%) 1359–1380 AD(6.1%)	1045–1088 AD(6.6%) 1105–1395 AD(88.8%)	01SD-B-C15	炭 B 区部屋 B2 の 床面直上
TKa-13143	710 $\pm$ 60	-24.2	1282–1324 AD(33.4%) 1345–1389 AD(34.8%)	1230–1250 AD(2.9%) 1261–1405 AD(92.5%)	01SD-B-C22	炭 B 区炉 2

SHCal04 (MaCormac et al. 2004) を用い、OxCal v.4.0.1 (Bronk Ramsey 1995, 2001, 2006) 較正プログラムにより較正

ペルー中央高地のハウハ地方ではインカ期に、高い場所から低い場所へという、セトルメント・パターン（遺跡分布の通時的パターン）の変化が起こっている（D'Altroy 1992）。サンタ・デリア遺跡の放射性炭素年代は同様の現象がカハマルカ盆地にも生じた可能性を示しているが、それを土器の特徴を基準として裏付けることはできない。Cajamarca Black-on-Orange の有無、あるいは出土土器全体の中での相対比がインカ期とそれ以前を分ける指標となる可能性はあるが、層位的に裏付けられているわけではない。

インカ期に在地の土器の特徴に大きな変化が認められないという現象は、先インカ期からインカ期への変化を連続的に捉えるエスピノサ・ソリアーノの解釈と合致するようである。そしてサンタ・デリアに代表されるカハマルカ文化が、7つのワランガに対応する地域全体に認められれば、先インカ期にカハマルカ王国の存在を主張する彼の解釈が支持されることになる。

8.3 タンタリカ遺跡の発掘

タンタリカ遺跡はアンデス山脈の西斜面のヘケテベケ川とチカマ川の間の中岳地帯に位置する（図8）。巡察記録と現在の地名を照らし合わせると、この地域はインカ期のワランガ・グスマンゴ、ワランガ・チュキマンゴに対応する。先述のように7つのワランガ全体の筆頭首長はワランガ・グスマンゴの首長であるため、7つのワランガの範囲内で非常に重要な地域であり、タンタリカ遺跡はその中でも最も保存状態の良い遺跡である（図15）。

タンタリカは同名の山に位置する遺跡であり、頂上部の標高は3289 m ある。頂上部から麓にかけて建築が連なっており、特に山の南東斜面の中腹部に建築物が集中している。近くに町や村がないということもあり保存状態が非常に良く、現在でも高さ5 m に達する壁や、切妻型の屋根付き壁が残っている。

発掘に当たっては遺跡全体の構造、時期を把握するため、異なった特徴を有する建築が存在する地区を複数選定した。ここでは先スペイン期に利用された、山の中腹部に設定したA区と、山の頂上付近に設定したC区のデータのみを提示する。山の麓に設定したB区からは植民地期の建築物が検出されたためここでは扱わない。

発掘調査の結果、タンタリカ遺跡の建築が綿密な設計に従って建設されたことが判明した。地面を掘り込み直接岩盤の上に基礎を据えて壁が立てられており、また基壇内部に仕切壁を設ける、土留め壁を複数段に分けそれぞれ方向を変える、土留め壁を二重にする、土留め壁の上部を内側にずらすなど、基壇の強度を高めるための様々な

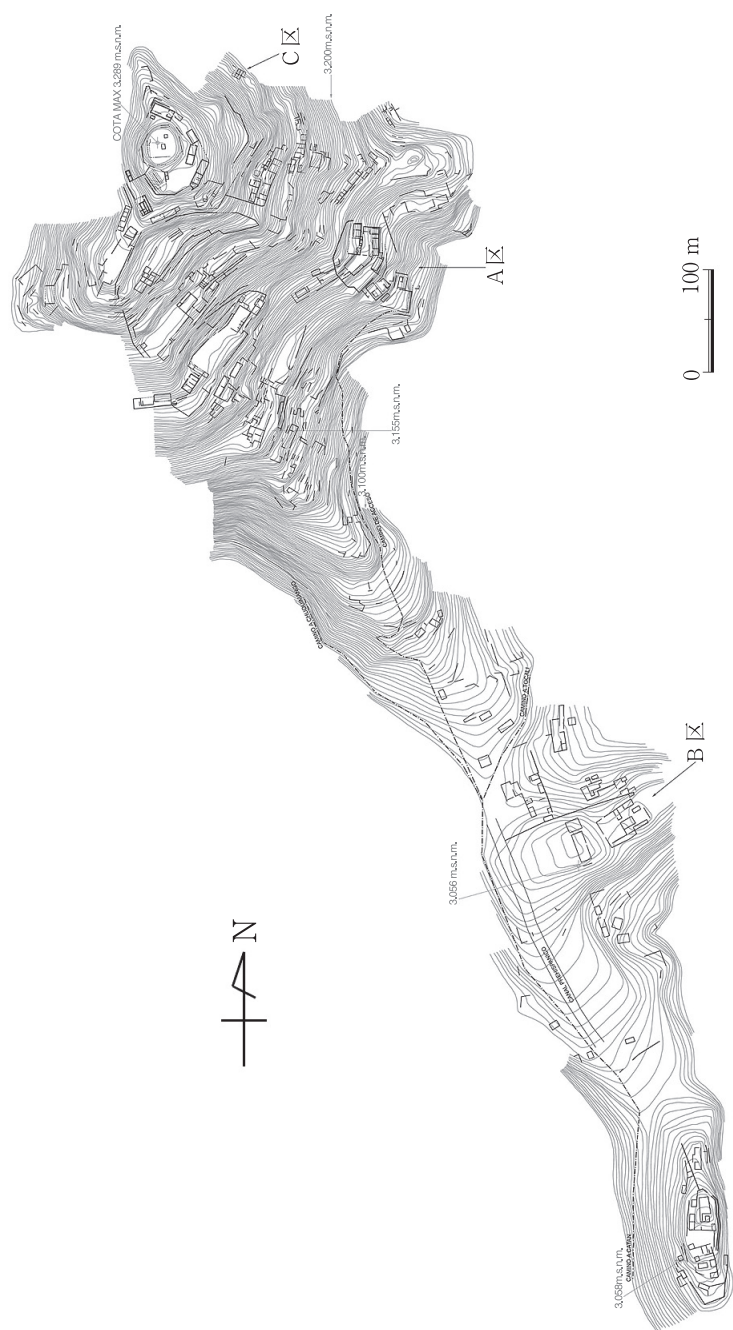


図 15 タンタリカ遺跡の全体図 (INC-Cajamarca 1997 を基に作成)

工夫が確認された。

山の中腹部に位置するA区では5段のテラスからなる一連の建築があり、低い方から順に第1テラスから第5テラスと登録した(図16)。A区の建築には壁龕や通風孔、水路など他の地区では認められない建築特徴が集中的に見られる。各テラス間は階段によって繋がっており、また複数のテラスを連結する水路が確認されている。

A区では少なくとも2つの建築時期があることが判明した。第2テラスでは、幅130～150 cm、奥行き100 cmの大型の壁龕を6つ伴う、内部の広さ5×2 mの「回廊の部屋」がはじめに建設された。その後この部屋は埋められ、その直上に内部が9×4 mの広さの部屋が建設された。この部屋状構造が載っている基壇の麓には水路を伴う階段が確認されたが、おそらく回廊の部屋の改修に伴う時期に埋められた。階段上に積もっていた焼土中に含まれていた炭を年代測定したところ、インカ期(A.D. 1450–1532)の年代を示したため(表2: TKa-12103)、インカ期に火を燃やして、その後水路と階段が埋められたと解釈できる。

同じく第2テラス上に位置する「壁龕の部屋」は、12.8×7.5 mの広さで、内部は2つに分かれている。片方の空間は内部に11の壁龕を伴い、そのうち2つは保存状態が良く現在でも漆喰、木製梁が残っている。梁を年代測定したところインカ期の年代を示した(表2: TKa-12015)。またインカ様式の土器も出土しているため、「壁龕の部屋」はインカ期に建設、あるいは改修されたと考えられる。

A区第2テラス以外の場所では、チムー様式土器、およびインカ様式土器が出土しており、タンタリカ遺跡がインカ期よりも前のチムー期(A.D. 1200–1450)に建設され、インカ期に再利用されたことを示している。この時期比定は放射性炭素年代と合致する(表2)。

山の頂上付近に、盗掘によって荒らされ、人骨や平石が散乱していた場所があったため、墓があるという想定でC区を設定し調査を実施した。発掘調査の結果、小部屋状構造の墓が確認された(図17)。

検出されたのは、地下式の部屋と地上の部屋の二層構造の墓であった。地下式の墓室は広さ2.1×1.24 m、高さ1.8 mの大きさで、内部に壁龕を2つ伴っていた。残念ながら盗掘によって荒らされていたため内部にどのように遺体が埋葬されていたかなどの詳細は不明である。時期については、墓室に至る地下通路にチムー様式土器(図19: A)が確認されているため、先インカ期に建設された可能性が高いと筆者は考えている。

地下墓室の直上には小さな部屋状構造が2つある。東側の空間は 250×130 cm, 西側の空間は 220×180 cm の大きさで, 50×50 cm の大きさの窓を伴う。かなり荒らされていたが, 西側の空間内部の壁際に複数の遺体が屈葬の状態を確認され, イン

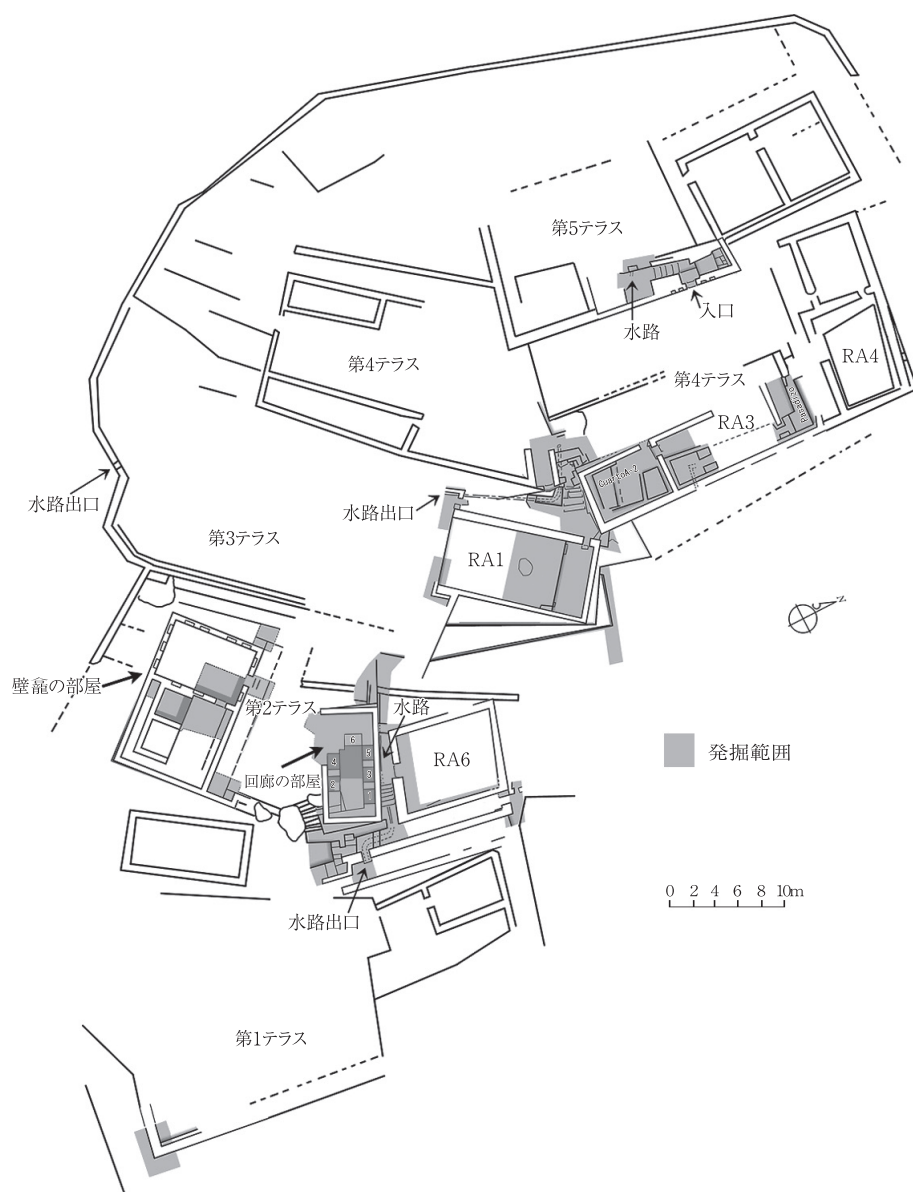


図 16 タンタリカ遺跡 A 区の建築

カ様式の土器や金属製のトゥブと呼ばれる留めピンを伴っていた。従って地下墓室と地上墓の建設時期は異なる可能性がある。

窓を伴う地上式の墓は、アンデス考古学で一般にチュルパと呼ばれ、体を折り曲げて布で巻かれた遺体を窓から入れる集合墓である。複数階のチュルパも存在するが、

表2：タントリカ遺跡出土遺物の ^{14}C 年代値

測定機 関番号	^{14}C BP	$\delta^{13}\text{C}$	Cal AD (1 σ)	Cal AD (2 σ)	登録番号	資料 出土コンテキスト
TKa-12015	340±60	-24.2	1500–1597 AD (50.8%) 1611–1646 AD (17.4%)	1453–1672 AD (92.1%) 1745–1755 AD (0.9%) 1764–1770 AD (0.5%) 1780–1797 AD (1.9%)	99TC-B-X3	木製梁 A 区回廊の部屋
TKa-12016	430±120	—	1432–1632 AD (68.2%) 1301–1366 AD (3.8%)	1375–1696 AD (85.3%) 1726–1807 AD (6.2%)	99TC-A-X4	木材 B 区植民地期の墓内
TKa-12105	420±70	-24.3	1448–1512 AD (36.5%) 1549–1562 AD (5.5%) 1571–1622 AD (26.2%)	1425–1644 AD (95.4%)	99TC-B-C32	炭 A 区回廊の部屋の床下
TKa-12102	330±60	-25.6	1500–1597 AD (48.8%) 1611–1650 AD (19.4%)	1457–1673 AD (88.9%) 1742–1773 AD (3.5%) 1778–1797 AD (2.9%)	99TC-B-C24	炭 A 区回廊の部屋の床下
TKa-12104	290±80	-25.0	1503–1592 AD (27%) 1615–1677 AD (22.1%) 1735–1800 AD (19.1%)	1458–1712 AD (64.3%) 1719–1813 AD (23.2%) 1836–1890 AD (4.9%) 1923–1952 AD (3.0%)	99TC-B-C31	炭 A 区回廊の部屋の床下
TKa-12103	440±70	-25.2	1436–1510 AD (45.2%) 1575–1621 AD (23.0%)	1416–1636 AD (95.4%)	99TC-B-C30	炭 A 区階段の上
TKa-12106	340±70	-25.3	1497–1648 AD (68.2%)	1450–1675 AD (87.7%) 1738–1799 AD (7.7%)	99TC-B-C38	炭 A 区カナル内
TKa-12017	310±100	—	1484–1674 AD (55.0%) 1740–1798 AD (13.2%)	1447–1815 AD (86.3%) 1830–1892 AD (35.9%) 1921–1952 AD (3.1%)	99TC-A-C2	炭 B 区植民地期の墓の覆土
TKa-12822	480±90	—	1402–1510 AD (52.8%) 1577–1621 AD (15.4%)	1320–1351 AD (3.7%) 1385–1644 AD (91.7%)	00TC-A-C10	炭 部屋 A1 の床下第 6 層
TKa-12823	640±80	—	1301–1367 AD (44.6%) 1374–1410 AD (23.6%)	1271–1450 AD (95.4%)	00TC-A-C12	炭 部屋 A1 の床下第 6 層
TKa-12824	700±130	—	1230–1250 AD (5.8%) 1261–1413 AD (62.4%)	1045–1087 AD (2.3%) 1107–1481 AD (93.1%)	00TC-A-C31	炭 部屋 A2 の床下第 4 層
TKa-12825	630±100	—	1300–1421 AD (68.2%)	1221–1490 AD (95.4%)	00TC-A-C33	炭 部屋 A2 の床下第 4 層
TKa-12826	440±70	—	1436–1510 AD (45.2%) 1575–1621 AD (23.0%)	1416–1636 AD (95.4%)	00TC-C-C5	炭 C 区炉内
TKa-12827	830±80	—	1162–1292 AD (68.2%)	1045–1088 AD (6.4%) 1106–1321 AD (83.1%) 1350–1387 AD (5.9%)	00TC-C-X18	炭化物 (梁?) C 区墓内

SHCal04 (McCormac et al. 2004) を用い、OxCal v.4.0.1 (Bronk Ramsey 1995, 2001, 2006) 較正プログラムにより較正

タンタリカ遺跡C区の墓は上部が破壊されていたので複数階であったかどうかは不明である。また、タンタリカ遺跡の他の地区ではチュルパはこれまで確認されていない。

この遺跡は18世紀にはタンタリユック遺跡と呼ばれ、山の中腹部で墓が一基発掘された(図18)。簡単なスケッチが残されているのみであるため詳しい事は分らないが、地下式の墓室はC区で確認された墓と類似し、そこから金製品、銅製品を含む副葬品が出土している。建設時期は不明であるが、C区の地下墓室と同じ時期であれば、インカ以前のチムー期の墓であると想定される。

タンタリカ遺跡出土土器の特徴は、サンタ・デリア遺跡の出土土器とは大きく異なる。当初の予想とは異なり、カハマルカ盆地に典型的なカオリン土器は殆ど出土せず、ペルー北海岸の土器と類似性を示す土器が多く出土した。

土器は装飾的な土器と非装飾土器に大別できる(Watanabe 2004a; 渡部 2004b)。装飾土器はペルー北海岸のチムー文化のものが主体である(図19)。黒色鍍形土器や底部に浮文を伴う碗など典型的なチムー様式の土器が多く出土している。そして、インカ期にはチムー様式土器に代わり装飾的なインカ様式土器(図20)、およびチムー様式とインカ様式の特徴が融合したチムー＝インカ様式土器が製作された。典型的なイ

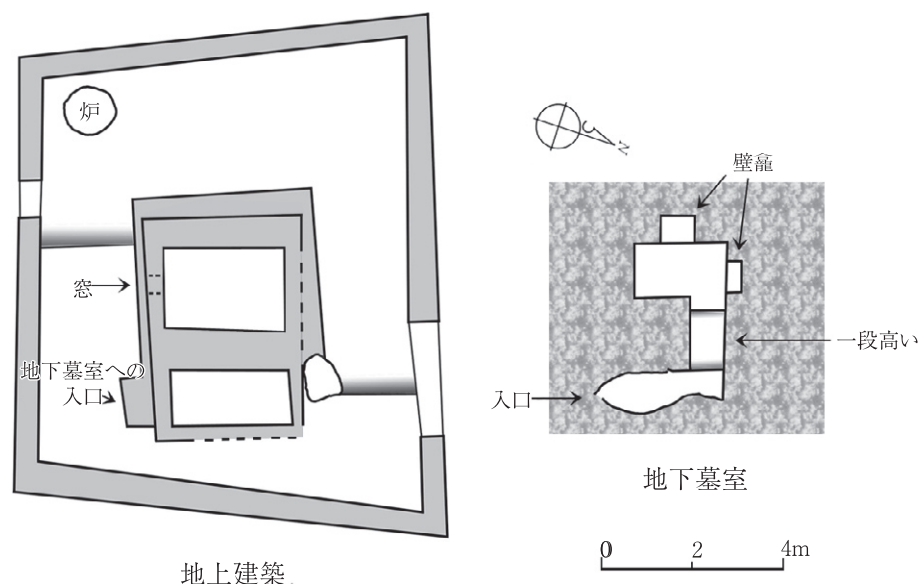


図17 タンタリカ遺跡C区の建築

インカ様式土器の1つが、アンデス考古学で一般にアリバロスと呼ばれる尖底壺である(図21:A)。これは酒などの液体を入れる器として用いられた土器であり、インカ様式土器が出土する遺跡ではほぼ確実に確認される器形である。一方で、同時代のカハマルカ盆地で製作されたカオリン土器 Amoshulca Complex は出土していない。

非装飾土器についてもタイプ分類を行い、Tantarica Coarse, Tantarica Orange, Tantarica Red Smoothed, Tantarica Black Painted の4つのタイプを設定した(Watanabe 2004a; 渡部 2004b)。Tantarica Coarse, および Tantarica Orange は混和材として大量の砂を含み、大型の瓶と短頸壺が主体である。両者とも同時代のカハマルカ盆地には認められない、北海岸に典型的な器形、胎土整形の特徴を有している。より緻密な胎土を有する Tantarica Red Smoothed は、口縁が外反した壺が主体であり、表面に整形痕が目立つ。これはカハマルカ盆地の Cajamarca Coarse Red と同系統の土器であり、同盆地に特有の穴あきの皿も確認されている。Tantarica Black Painted は高台付きあるいは平底、丸底の黒色碗である。平底、丸底の碗は北海岸のみで認められるが、高台付きの黒色碗は、北海岸、カハマルカ盆地の両地域で製作されているため、Tantarica Black Painted の系譜をどちらか片方の地域のみに通することはできない。まとめると、タンタリカ遺跡出土の非装飾土器は北海岸系の土器が主体であるが、カハマルカ盆地

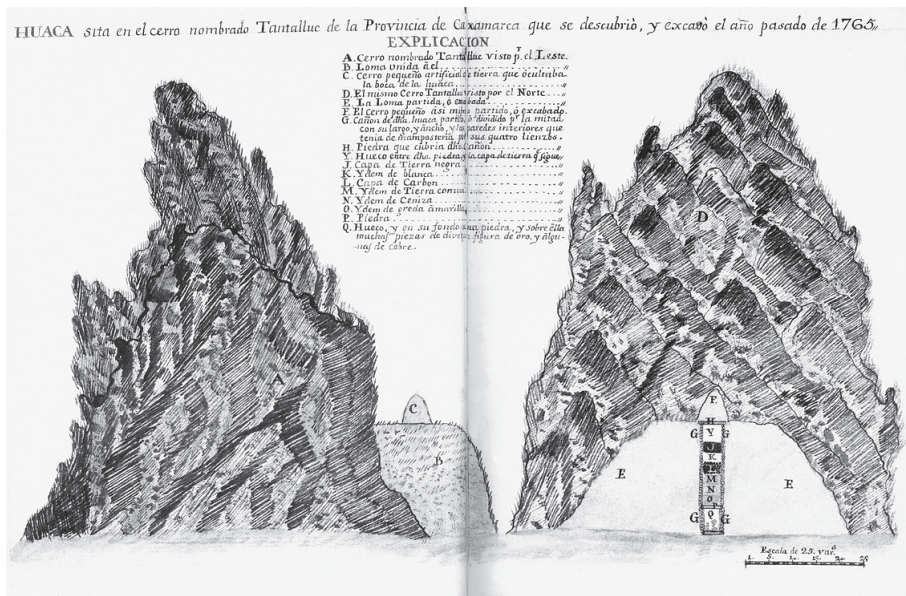


図18 ワカ・タンタリユック (Martínez Compañón 1991 [1789])

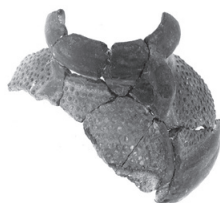
の土器製作の特徴を有する土器も存在する。

装飾土器はチムー様式からインカ様式、チムー＝インカ様式に変化したが、非装飾土器はインカ期に入っても大きく変化せず製作が続けられたと考えられる。少なくともチムー様式土器が出土する層・地区と、インカ様式土器が出土する層・地区の間で、非装飾土器の特徴の違いは認められなかった。またタンタリカ遺跡はインカ期に再利用されたが、インカ期に新たに建設された遺跡とはインカ様式土器の出土の仕方が異なる。この点については第9節で検討したい。

発掘データを総合すると、タンタリカの土器、建築、埋葬形態の特徴はサンタ・デリアのそれとは大きく異なるといえる。タンタリカ遺跡の位置するアンデス山脈西側のヘケテペケ川流域ではカハマルカ盆地の山地系の文化とは異なる、北海岸系のチムー文化が広がっていた。またペルシネンが指摘するようにヘケテペケ川よりも北のサーニャ川上流域でもペルー北海岸系の黒色土器が主流である²²⁾ (Pärssinen 1997)。



A 鐙形土器 (C区地下墓室出土)



B 壺



C 鐙形土器



D 破片

図19 チムー様式土器 (タンタリカ遺跡出土)

8.4 考察

考古学データは、7つのワランガに対応する地域が、インカ期以前には、カハマルカ文化が広まっているカハマルカ盆地を中心とした地域と、アンデス山脈の西側のチムー文化が主流の地域に分かれる、ということを示している。

現在のところ発掘データが少ないため、筆者はたった2つの遺跡のデータを敷衍して全体の状況を復元している。しかし、前述の通りアンデス社会の範囲を明確な線で区切れるような面として想定することは不適切である一方で、社会の中心は明確である。情報が少ない段階における研究の手続きとして、社会の中心と考えられる大規模な遺跡を選定して互いに比較するという手法は妥当であろう。

では、7つのワランガに対応する地域内に2つの文化系統が認められるという状況を、どのように解釈したら良いのか。明らかに、エスピノサ・ソリアーノが想定する、インカ期以前に7つのワランガに近い形で「カハマルカ王国（クイスマンク王国）」



A 皿



B 深皿



C 把手付き壺



D 破片

図20 インカ様式土器（タンタリカ遺跡出土）



図 21 インカ様式土器の器形 (Valcárcel 1934a, 1934b, 1935a, 1935b を改編)

が存在したという解釈は支持できない。最も整合性のあるのは、インカ期の7つのワランガは、インカ国家の支配下でそれ以前の少なくとも2つの文化系統の人間集団が分断され、統合されることによって成立したという解釈である。カハマルカ地方の南のワマチューコ地方においても同様にインカ期の民族集団のまとまりをインカ期以前に見いだすことは難しい(Topic 1998)。インカ期の民族集団の分布から、遡及的にそれ以前の状況を復元することは危険であるといえる。

筆者は現在のところタンタリカはチムー国家の支配下で建設され、チムー期にタンタリカを核として新たなまとまりができたと考えている²³⁾。チムー国家がタンタリカに支配の拠点を設け、ヘケテベケ川とチカマ川の間の中岳地帯を中心に新たな行政単位を創出した場合、それをどのように呼ばよいか。インカ国家の支配下では、例えば、ペルー南高地のルパカ、ペルー南海岸のチンチャなどの集団が新たに形成された、あるいは大規模化したと考えられるが、それらの人々が全てインカと呼ばれたわけではない。同様にチムーの支配下の人々が全て支配者と同じ名称で呼ばれたわけではなく、タンタリカ周辺の人間集団も異なった名称で呼ばれたのであろう。

ロストウォロフスキは、古文書の分析に基づき、「北海岸では強力な中央集権的国家が平地の一部を支配しただけでなく、海岸地方に隣接したカハマルカ山地に成立した、海岸起源の首長制社会と思われるものと手を結んでいた」(ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 295-296)と述べている。筆者は、ペルー北高地に成立したそのような「首長制社会」はそもそもチムーの庇護の下で成立したという可能性を考えている。インカの支配下でチンチャ、ルパカなどの社会が繁栄したのと同様の現象が、チムー期のペルー北部高地に起こっていたのではないか。このように考えるとインカ国家とチムー国家の間に共通点を見いだすことができる²⁴⁾。

9 インカ様式の土器、建築

インカ期カハマルカ地方に生じた変化を考察するため、インカ期以前の状況を考古学データから復元し、それが歴史史料を基に再構成したモデルとは合致しないことを確認した。しかし単純に土器や建築の違いをそのまま人間集団の違いに結びつけるのではなく、その手続きの妥当性を説明する必要性があろう。

過去の無文字社会を扱う場合、土器や建築、埋葬形態などの物質的証拠を手がかりとし、その組み合わせを基準とし、文化という単位を設定する。ここではインカの存在を考古学的に認定する代表的な証拠である建築と土器を取り上げ、それと人間集団

の関係を考察してみたい。建築と土器はインカ考古学において最も頻繁に扱われている対象であり、またそれらにはインカ文化の特徴が典型的に示されている。つまり石器や金属器と異なり、建築と土器にはインカと識別できる顕著な特徴があるといえる。

インカ様式の典型的な建築の壁は、表面から見ると隙間なく切石が組み合わせられ、壁の裏込めには土が積まれ、縦に長い台形壁龕をしばしば伴う。広場のまわりに建物を放射状に配置する設計などもインカの特徴であるが、他の文化の建築にも認められるため、単独ではインカの建築と識別する指標にはなりにくい。また概してインカ様式の建築を確認できる遺跡の数はインカ様式土器が分布する遺跡よりも少ない。

インカ様式の土器の文様や胎土に画一性はないが、器形に明瞭な特徴があり、規格性が高い（図 21）。特にアンデス考古学で一般にアリバロスと呼ばれる尖底長頸壺が有名であり、出土量も多い。他には大型の把手、底部付近で二度屈折する特徴などがインカ様式土器の器形に特有である。しかしインカ様式土器の全器形が確認されている遺跡は首都クスコおよびその周辺に位置する遺跡以外に例はなく、地方のインカ期の遺跡ではアリバロス（尖底長頸壺）を含むいくつかの器形の土器が選択的に製作された。例えばタントリカ遺跡で確認されている器形は図 21 の A, J, M または N, P, Q, U, V, Z, a である。現在のところ、器形の選択がどのような基準で行われたのかは不明である。また、インカ様式土器の文様を忠実に模倣、反復する傾向は弱く、地方独自の文様が施された場合もある。主にペルー北海岸で製作されたチムー＝インカ様式の黒色アリバロス形土器がその一例であり、これはタントリカ遺跡でも確認されている。

土器をはじめとする工芸品の生産を、独立生産（independent production）と従属生産（attached production）に分ける考え方がある（Costin 2001）。前者は他の集団から独立に特定の職業に特化することを指すが、後者は大規模な政体に組み込まれ、その支配下で各集団が特定の仕事や役割を担うことを指す。

インカ国家においては、人々は王、首長のために生産物そのものを納めるのではなく、労働することによって税を納めていた（Murra 1980 [1955]）。つまり行政センターなどの場に集まり生産活動に従事し、また道路や橋の建設のために労働力を供出したのである。インカ国家の経済システムは典型的な従属生産のあり方を示しており、インカ王、首長の支配下で労働は管理された。工芸品の生産、運搬はインカ王、首長の下でコントロールされたのであり、決して独立して製作され、運ばれたわけではな

い²⁵⁾ (Ramírez 1982; 1995; 1997)。規模の差はあれ地方社会においても同様に、首長の下で労働がコントロールされたと考えられる。

従属生産というモデルで土器の製作を考えてみると、ある集団が専門的に土器を製作して、それを他の物資と交換し、その結果土器が複数の社会に広まるということは考えにくい。そのため、土器などの工芸品の特徴の共通性から社会のまとまりを想定することは妥当であると筆者は考えている。特に良質の土器は有力な王・首長の支配下に組み込まれることによって製作可能となる。実際先インカ期においても装飾的な精製土器が認められるのは大規模社会が存在した時代であるため、良質の精製土器が従属生産によって製作されたという解釈には整合性がある。

また、先スペイン期アンデスにおいて製作された装飾的な土器には、現代社会あるいは植民地時代の焼き物とは異なる意味が付与されていた。アンデスにおける社会のまとまりは、同じワカを奉じる人たちの集合である。そして儀礼への参加が社会を規定する大きな要因であり、儀礼に用いられる装飾的な精製土器は儀礼的属性を備え、その類似性は儀礼体系の共通性に対応しているといえる。そのため各時代、各地域によって特徴的な土器が製作され、多くの場合、装飾的な土器は墓や奉納などの儀礼的コンテキストで用いられた。

インカ期には土器、特に酒を貯蔵する壺が大量に製作され、酒を注いで飲むためにケロと呼ばれるコップ形の木器が用いられた (Cummins 2002)。インカ様式の土器はしばしば墓に副葬品として用いられたが、それは被葬者の所有物というよりも、埋葬された人と儀礼を行う側との間の関係性を示していると筆者は考えている。つまりあくまで土器を用いた儀礼を通じて人間関係を構築することが重要であった。

タンタリカ遺跡では、植民地期に先スペイン期の精製土器であるインカ様式土器、チムー＝インカ様式土器は姿を消し、米国製土器を含め土器の特徴は全面的に変化した (渡部 2004b)。また、タンタリカ遺跡で検出された植民地時代初期の墓では、土器が副葬品として用いられたことは一切なかった。同様にカハマルカ文化のカオリン土器や他の地域の文様付き土器も、植民地時代初期に瞬く間に消えていった。このことは単に土器製作技術の変化だけではなく、儀礼体系の変化にも対応しているであろう。

新たな場に設置され、インカ様式の建築が建ち並ぶ遺跡を、インカ期に時期比定することは容易である。しかしインカ期にインカ国家の支配下で建設されたとしても、全ての建築がインカ様式に従っているわけではない。地域ごとに建築材が異なり、建

築のバリエーションがあるため、インカ様式の建築が確認できないからといって、インカ期の遺跡ではないとはいえない。同様にインカ様式の土器の欠如を根拠として、インカ期の遺跡ではないと判定はできない。一見したところインカ期に建設されたことが分からない遺構も多く存在するし、タンタリカ遺跡やペルー北海岸ヘケテペケ川下流域に位置するファルファン遺跡（Mackey 2005; 2006）など、それ以前に建設された建築がインカ期に引き続き利用された場合もある。タンタリカ遺跡ではインカ様式の特徴を備えた切石の建築物は確認できなかったが、少なくともいくつかの建物がインカ期に建設、あるいは改修されたことは確かである。

ではインカ国家の本質をインカ王と支配関係を結んだ人々の総体として捉えるならば、一体インカ様式の土器や建築の有無、頻度は何に対応しているのか。

アンデス考古学において用いられる概念の1つに「ホライズン」がある。それは比較的短期間に同一様式の遺物・遺構が広範囲に認められる現象を指し、同時代性を示す概念である。インカ期は同一様式の土器、建築の広まりが顕著な時代であり、1つのホライズンとして捉えられるが、その出現の程度には地域差や遺跡間差がある。

首都クスコから離れた地方では、インカ道上に配置された行政センターにおいて典型的なインカ様式の建築や土器が認められる。大規模な行政センターはインカ期直前の状況があまり顕著ではない地域に多く、逆に前時代に大規模な社会があった地域、社会のまとまりが明瞭な地域にはあまり確認できない、という大まかな分布パターンが認められる。例えば、ワヌコ・パンパ、プンプ（図2）などの大規模な行政センターが位置するペルー中央高地では、インカ期の証拠が非常に明瞭であるにもかかわらず、インカ期よりも前の状況はよく分からない。ワヌコ・パンパでは出土土器の100%がインカ様式であり、それ以外の土器はなかったため、それ以前にどのような文化があり、インカ期にどのように変化したかを再構成することはできない（Morris and Thompson 1985）。インカ期になって社会が大規模化し、それ以前の活動を示す痕跡を隠してしまったともいえる。また一方で、チムー国家の中核地であるペルー北海岸では、インカ様式の切石建築が残る、あるいは典型的なインカ様式土器が大量に出土する行政センターは確認されていない。こうした状況をどのように解釈できるだろうか。

政治的側面に注目すれば、たびたび反乱が起こる地域には、大規模な軍隊を送る必要があるため、その中継地には物資を蓄えるため大規模な行政センターが作られ、王の支配下でインカ様式の建物が建設され、インカ様式の土器が製作されたと説明できよう。一方で、行政センターの儀礼的性格や土器の儀礼的側面に注目すれば、征服し

て間もない人々に対しては、インカ王がたびたび訪れ、儀礼を行う必要があったといえる。そこで出土するインカ様式の土器は、インカ王や首長と共に参加する饗宴に使用された道具と解釈することができる。もちろん政治的側面と儀礼的側面は連動しているため、分けて論じることは不適切であり、両者の関係性を常に念頭に置く必要がある。

インカの証拠はインカ道上に配置された行政センターだけではなく、それ以外の遺跡でも認められる。しかしインカ様式の土器や建築の出土状況は遺跡ごとにより異なる。

インカ以前に小規模な集団が分散していた地域では人間集団が統合され、新たにまとまりが創出された。この場合、その繋がりを規定するのはインカ王との関係である。インカ期に新しく設置された場ではアリバロスをはじめとするインカ様式土器が多く出土する。ジョン・ヒスロップはクスコ周辺地域以外に典型的なインカ様式の建築や土器が認められる地域の例として、ペルー南海岸、ティティカカ湖周辺、エクアドル高地を挙げている (Hyslop 1993: 344)。いずれも先インカ期の状況が不明瞭な地域である。また、ペルー中央海岸では表面観察からは典型的なインカ様式の建築や土器は容易には確認できないが、近年発掘調査によってインカ期の証拠が数多く報告されている。

一方、インカ様式の土器や建築を見つけることが困難で、それまでの土器様式に変化が認められない地域もある。例えばカハマルカ盆地では、行政センターではインカ様式土器が用いられたが、その他の場ではカオリン土器が引き続き製作されたという併存状況が認められる。このことはインカの支配下でも、従来の儀礼的紐帯が温存されたことを示している²⁶⁾。つまり征服以前から存在した既存のまとまりの一部が、インカが導入したシステムの中にワランガなどの単位で組み込まれることによって、結果的に残存したと解釈できる。

また、インカ期に再利用された遺跡では、既存の土器の器種構成の中に、新たにインカ様式の土器が加わる、あるいは既存の精製土器と置換するという現象が認められる。例えばタントリカ遺跡の事例は、チムー国家の組織が解体されインカの支配下で再編成されたことに伴い、チムー様式土器を用いた儀礼からインカ様式土器を用いた儀礼へ変化したことを示しているといえよう。また土着の土器製作伝統にインカ様式の要素を取り入れた地方インカ様式と呼ばれる土器は、在地の儀礼体系とインカの儀礼体系の習合を示す指標の1つと見ることもできる。

今後インカ国家における地方支配を考える場合、支配以前の状況、即ち初期条件を念頭に置き、インカ様式の土器や建築の有無、頻度と社会変化の関係を説明するモデルを精緻化していく必要があろう。

10 おわりに

本論文ではペルー北部高地カハマルカ地方を事例として、インカ国家における地方支配の実態を考察した。

インカ国家においては、地方の民族集団はあまり手を加えられずに支配下に組み込まれたのではなく、インカによる征服後、人間集団が分断統合され、新たな行政単位が形成されたと考えられる。こうした変化を再構成するのに、土器をはじめとする遺物、墓などの遺構を手がかりとして人間集団の帰属を再構成した。先スペイン期アンデスにおいては、土器をはじめとする工芸品は、一つの社会内で王や首長の下で労働がコントロールされ生産されるものであり、決して独立に生産され、流通するものではなかった。また、本論文の前半で論じたようにアンデス社会の単位は同じワカを信仰し、儀礼を共同に行う人々の集合である。儀礼に用いられる装飾的土器を儀礼体系の共通性を示す指標として社会の単位を設定するという手法は、現在の研究段階における議論の手続きとしては妥当であろう。また本論文では、インカ様式の遺構、遺物の有無だけでなく、その出現の仕方の違い、頻度の差からインカ期に生じた変化を考察した。

現在求められているのは発掘データを闇雲に増やすことではなく、多様な考古学データを総合して解釈する新たな視点である。本論文で行った議論が今後の研究の方向性を示すきっかけとなれば幸いである。

謝 辞

本論文は国立民族学博物館共同研究会「インカ帝国再考：『帝国』概念の解体と帝国像の受容過程に関する研究」（研究代表者：関雄二教授）において2005年11月26日に行った口頭発表を基にしている。研究会出席者からは貴重なコメントをいただいた。

1999年、2000年に実施されたタンタリカ遺跡の発掘調査は「アンデス先史の人類学的研究」（科学研究費補助金・基盤研究A2、研究代表者：加藤泰建）の一部として実施された。また高梨学術奨励基金より助成を受けた（平成11年、12年「ペルー北高地カハマルカ王国の遺跡調査に基づく研究」、研究代表者：渡部森哉）。ペルー文化庁にはクントゥル・ワシ遺跡の調査との

共同プロジェクトとして発掘許可申請が行われた（代表者：大貫良夫，副代表者：ワルテル・トッソ，加藤泰建）。

2001年のサンタ・デリア遺跡の発掘調査は、筆者が日本学術振興会海外特別研究員としてペルー・カトリック大学人文学部に派遣されている間に実施された（平成13年度採用）。ペルー文化庁にはカハマルカ盆地の一般調査との共同プロジェクトとして調査許可申請が行われた（代表者：關雄二，副代表者：フアン・ウガス）。

タンタリカ遺跡，サンタ・デリア遺跡の放射性炭素年代測定に関しては東京大学の吉田邦夫先生にお世話になった。竹内繁氏からは内容に関して貴重なコメントをいただいた。3名の査読者からのコメントは本稿を書き直す際に大いに参考となった。アントニサーミ・サガヤラージ氏には英文要約をチェックしていただいた。記して感謝したい。

本研究は、2006年度南山大学バツへ研究奨励金 I-A-2，平成15～17年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費），平成18年度科学研究費補助金（若手研究（スタートアップ））による研究成果である。

注

- 1) ケチュア語で「クラカ (curaca)」，アイマラ語で「マルク (mallqu)」，マイク (mayqu)」と呼ばれる。
- 2) しばしば「畑」訳される「チャクラ (chacra)」というケチュア語の単語は、本来、土地そのものではなく、労働と結びついた概念である。(González Holguín 1989 [1608]: 91; Santo Tomás 1951 [1560]: 255)。
- 3) また、インカ国家の空間的範囲を問題にする場合、その土地の資源を利用するために人間集団が直接送り込まれる場合と、その土地の人々と支配—被支配関係が結ばれる場合を区別する必要がある（Ramírez 2005: 33）。
- 4) 「jurisdiction」に日本語でどのような訳語を与えるのか難しいが、本稿では人間に対するという意味で「対人」と、支配権の範囲を示す「権限」を合わせて、「対人権限」という訳語を当てておく。ラミーレスの他に「jurisdiction」を使用する研究者としてはオリビア・ハリスがいる（Harris 1997）。
- 5) 熊井茂行はタワテンシスユがスユであり、国家であると主張している（熊井 1998: 87, 2000: 36, 2002: 225, 237, 2004: 90）。しかしスユはあくまで分割された部分に用いられるのであって、最大のまとまりが1つのスユではありえない。
また、「パナカ」とよばれる親族集団もスユのひとつであった。（中略）インカ王は、その死後もパナカの始祖として生前同様にそのスユを維持したことになる。（熊井 2004: 90）とも述べている。その根拠の1つは「スユ」と「パナカ」という2つのケチュア語が、「パルシアリダ」という同じスペイン語の訳語を与えられていることにあるようだ（熊井 2002: 227, 232, 237）。しかし、本来別の2つのケチュア語の単語を、スペイン人が意味の違いを理解できず混乱した可能性がある。歴代インカ王の親族集団である「パナカ」は分割された一部分ではなく、独立した存在として捉えるべきであろう。
- 6) 現代の研究者ではベルシネンがグアamani (guamani) という用語を使用している（Pärssinen 2004）。
- 7) グアamaniを合わせて各スユになるわけではない。各スユは分割された部分であり、グアamaniは小さい単位が足されて形成されたものであり、発想が異なっている。
- 8) ラミーレスは、固定された首都をもっていなかった16世紀までのヨーロッパの王国を比較対象として、巡回する王室 (peripatetic, itinerant court) というモデルを提示している（Ramírez 2005: 9）。
- 9) アイマラ語では「マルカ (marka)」である。

- 10) 空間的に固定されていないワカが社会の中心となることがありえるか、あるいは中心を移動させることが可能かについては、議論の余地がある。
- 11) インカの起源神話では、インカ族の祖先はティティカカ湖、あるいはクスコの南のパカリクタンボ洞窟から出てきたとされる。しかし、征服の過程で用いられるのは太陽の息子という言説である。征服や地方支配を考える上で重要なのは他の民族集団との関係であり、太陽をインカ王のワカと想定して問題ない。
- 12) 首都クスコでは中心コリカンチャから各方向にセケと呼ばれる想像上の線が延びていた。セケは複数のワカを結んだ線であり、各セケ上にコリカンチャから最も離れたワカは存在するが、それらの間の関係は明確ではない。
- 13) ラミーレスはインカ国家における対人関係に基づく支配システムの脆弱性を克服するためのコスモロジーの重要性を強調し、クリフォード・ギアツの劇場国家モデルを援用し、インカ国家において征服活動が儀礼的に意味づけられていたことを指摘している。ただし、劇場国家モデルをそのまま当てはめインカ国家を説明することには難色を示している (Ramírez 2005: 218)。友枝啓泰も同様にインカ国家を説明するのに劇場国家をモデルとしている (Tomoeeda 2004)。物質的側面については Ramírez 2005: 220 も参照。
- 14) ただし伝統的王朝モデルで第12代王とされるワスカルは異なる。ロストウォロフスキもこの戦士的な精神の喪失について言及している (ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 143)。
- 15) ヤナと呼ばれる隷属民もこうした、新しいインカ王の力の及ぶ射程外に置かれたと考えることもできる (cf. 網野 1998)。
- 16) パチャクティ、トバ・インカ、ワイナ・カパックといった複数の歴代王とそれぞれ同時に関係を保持した民族集団の存在を示す証拠は明確ではない。ワヌコ地方の巡察記録の中に、1つの集団がトバ・インカとワイナ・カパックの各インカ王のために労働力を差し出しているという記述がある (Ortiz de Zúñiga 1967 [1562]: 306; ピース・増田 1988: 107; 網野 1998: 153; 熊井 2002: 231)。しかしパチャクティに対する労働については言及されていない。
- 17) 熊井も同様に、新インカ王が新たに臣民との支配——被支配関係を構築し直す必要があったことを指摘し、「タワンティンスユは、それぞれのインカ王の国家が歴史的に累積した複合体であった」(熊井 2002: 237)、「インカ国家の実体は、支配権だけであり、また歴代のそれぞれのインカ王の国家の歴史的な重層であった」(熊井 2004: 90)と述べる。「歴史的に累積した複合体」、「歴史的な重層」という言葉が十分に説明されていないが、インカ王は即位後ゼロから出発し、新インカ王とは独立に歴代インカ王のバナカ集団は存続するため、現役のインカ王と過去のインカ王との関係を重層的ではなく、併存関係と捉えることもできる。
- 18) 類似した事例が中米マヤ地域に認められるが、例えば大越翼は次のように述べている。「マヤの王権が相対的に弱い求心力、強制力を持ち、したがってその存在自体が潜在的に脆弱なものであったとするならば、それを補正するいくつかの機構が存在したといってよい。その一つが、王権の神聖性を宇宙論の中で強調し、それに加えて半ば神格化された王家の始祖からの血統の連続性を示して、王権を正当化するという言説行為である。」(大越 2003: 185)
 インカ王も多くの場合は前王の息子の中から選ばれた。しかしヨーロッパにおける長子相続制とは異なり、最も実力がある者が王として選ばれた (ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 145–157)。また、各地に征服を行ったインカ王は歴代インカ王との連続性に基づき王位の正統性を主張するのではなく、太陽の息子を名乗り共時的に関係性を示した。これは文字社会のマヤと、無文字社会のインカの大きな違いである。
- 19) 熊井はまた「歴代のインカ王は、新たな境界を設定するとともに、既定の境界線や前王の設定した境界線を、あらたに再確認している」(熊井 2000: 32)と述べている。しかし先述したように、本来土地の境界を示すものではなかった印が、植民地期に境界として再利用され、モホンと呼ばれたと考えるべきであろう。
- 20) インカ族以外にカパックを使用していることから、キャサリン・ジュリアンはサルミエント・デ・ガンボアがカパックの正確な意味を理解せずに用いたと考えている (Julien 2000)。
- 21) 1567年の巡察記録は、その一部が発見されているが刊行されていない (Pärssinen 1992; Ramírez 2002; Remy 1983, 1986, 1992)。
- 22) 同地域に分布するワランガ・チョンダルの、子音Fを含む海岸系の名字の集団が存在するという状況と合致する (Rostworowski 1992)。
- 23) この意味において、筆者はカハマルカ王国(クイスマンク王国)の存在を否定していない。

- 否定するのはインカ期の7つのワランガの祖型と見なすことである。
- 24) カハマルカ盆地がチムー国家の支配下に入っていた場合、インカと同様の政策をチムー国家が実施し、インカ国家の支配下と同様にカハマルカ様式土器が変化せずに存続した可能性を考えなければならない。この場合「7つのワランガ=クイスマンク王国」という解釈は可能である。しかし現在の所、カハマルカ盆地がチムー国家の直接的支配下におかれていたことを示す証拠は確認されていない。
- 25) 一方で、ロストウォロフスキなどはインカ期に海岸地帯に商人が存在したと解釈し、それらの起源が先インカ期に遡る可能性を指摘している (Rostworowski 1989 [1970])。
- 26) そもそも地方社会のワカと、征服を行ったインカ王のワカは併存可能である。この意味において、インカが地方社会の宗教に寛容であったという点が理解できる。

文 献

- アコスタ, ホセ・デ (Acosta, José de)
1966 [1590] 『大航海時代叢書III-IV 新大陸自然文化史』(上・下) 増田義郎訳, 東京: 岩波書店。
- 網野徹哉
1998 「アメリカ古代帝国の生成——インカをめぐる諸問題」『岩波講座世界歴史5 帝国と支配』pp. 141-165, 東京: 岩波書店。
- 無名征服者 (Anónimo)
1966 [1534] 「ペルー征服記」増田義郎訳, 『大航海時代叢書IV 新大陸自然文化史』(下) pp. 473-513, 東京: 岩波書店。
- アリアーガ, パブロ・ホセ・デ (Arriaga, Pablo José de)
1984 [1621] 「ピルーにおける偶像崇拜の根絶」増田義郎訳, 『大航海時代叢書第II期16 ペルー王国史』pp. 363-606, 東京: 岩波書店。
- Bronk Ramsey, Christopher
1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: The OxCal program. *Radiocarbon* 37 (2): 425-430.
2001 Development of the radiocarbon calibration program OxCal. *Radiocarbon* 43 (2A): 355-363.
2006 OxCal v. 4.0.1.
- シエサ・デ・レオン, ペドロ・デ (Cieza de León, Pedro de)
1979 [1553] 『大航海時代叢書第II期15 インカ帝国史』増田義郎訳, 東京: 岩波書店。
- Cabello Valboa, Miguel
1951 [1586] *Miscelánea Antártica: Una Historia del Perú Antiguo*. Lima: Instituto de Etnología, Facultad de Letras, Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Cerrón-Palomino, Rodolfo
2005 El aimara como lengua oficial de los incas. *Boletín de Arqueología PUCP* 8 (2004): 9-21.
- Conrad, Geoffrey W. and Arthur A. Demarest
1984 *Religion and Empire: The Dynamics of Aztec and Inca Expansionism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Costin, Cathy Lynne
2001 Craft Production Systems. In G. M. Feinman and T. D. Price (eds.) *Archaeology at the Millennium: A Sourcebook*, pp. 273-327. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Cummins, Thomas B. F.
2002 *Toasts with the Inca: Andean Abstraction and Colonial Images on Quero Vessels*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- D'Altroy, Terence N.
1992 *Provincial Power in the Inka Empire*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Espinoza Soriano, Waldemar
1986 [1967] El primer informe etnológico sobre Cajamarca: 1540. In F. Silva Santisteban, W. Espinoza Soriano and R. Ravines (eds.) *Historia de Cajamarca 2: Etnohistoria*

- y *Lingüística*, pp. 343–364. Cajamarca: Instituto Nacional de Cultura de Cajamarca, Corporación de Desarrollo de Cajamarca.
- Farrington, Ian S.
1992 Ritual Geography, Settlement Patterns and the Characterization of the Provinces of the Inka Heartland. *World Archaeology* 23 (3): 368–385.
1998 The Concept of Cusco. *Tawantinsuyu* 5: 53–59.
- ガルシラソ・デ・ラ・ベガ, インカ (Garcilaso de la Vega, Inca)
1985/86 [1609] 『大航海時代叢書エクストラ シリーズ I・II インカ皇統記』(上・下) 牛島信明訳, 東京: 岩波書店。
- González Holguín, Diego
1989 [1608] *Vocabulario de la Lengua General de Todo el Perú Llamada Lengua Qquichua o del Inca*. Lima: Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Guaman Poma de Ayala, Felipe
1987 [ca. 1615] *Nueva Crónica y Buen Gobierno*. Edición, introducción y notas de J. V. Murra, R. Adorno y J. L. Urioste. 3 vols. Crónica de América. Núm 29a-b-c. Madrid: Historia 16.
- Harris, Olivia
1997 Los límites como problema: mapas etnohistóricos de los andes bolivianos. In T. Bouysse-Cassagne (ed.) *Saberes y Memorias en los Andes: In Memoriam Thierry Saignes*, pp. 351–373. Paris: Institut des Hautes Études de l'Amérique Latine, Lima: Institut Français d'Études Andines.
- Houston, Stephen D. and Tom Cummins
2004 Body, Presence, and Space in Andean and Mesoamerican Rulership. In S. T. Evans and J. Pillsbury (eds.) *Palaces of the Ancient New World*, pp. 359–398. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Hyslop, John
1984 *The Inka Road System*. New York: Academic Press.
1993 Factors Influencing the Transmission and Distribution of Inka Cultural Materials throughout Tawantinsuyu. In D. S. Rice (ed.) *Latin American Horizons*, pp. 337–356. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks.
- Instituto Nacional de Cultura-Cajamarca
1997 *Defensa, Conservación y Levantamiento Topográfico del Monumento Arqueológico Tantarica –Contumazá*. Informe-I etapa. Cajamarca: Instituto Nacional de Cultura-Cajamarca.
- Julien, Catherine
2000 *Reading Inca History*. Iowa City: University of Iowa Press.
- Julien, Daniel G.
1988 *Ancient Cuzimancu: Settlement and Cultural Dynamics in the Cajamarca Region of the North Highlands of Peru*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Texas at Austin.
1993 Late Pre-Inkaic Ethnic Groups in Highland Peru: An Archaeological-Ethnohistorical Model of the Political Geography of the Cajamarca Region. *Latin American Antiquity* 4 (3): 246–273.
- 熊井茂行
1996 「インカ帝国」概念の形成と展開——「インカ帝国」像についての予備的考察』『総合科学研究』54 (『明治学院論叢』584): 43–78。
1998 「タウンティンスユ——インカ国家の国家像」大貫良夫・木村秀雄編『文化人類学の展開——南アメリカのフィールドから』pp. 69–92, 東京: 北樹出版。
2000 「タウンティンスユの国境と境界——再確認されるべきものとしての「それぞれのインカ王のタウンティンスユ」」『総合科学研究』64 (『明治学院論叢』644): 1–51。
2002 「インカ王権と国家」『岩波講座天皇と王権を考える 5 王権と儀礼』pp. 221–241, 東京: 岩波書店。
2004 「「インカ帝国」はあったか?」『研究所年報』7: 85–94。
- Mackey, Carol
2005 La transformación socioeconómica de Farfán bajo el gobierno inka. *Boletín de Arqueología PUCP* 7 (2003): 321–353.

- 2006 Elite Residences at Farfán: A Comparison of the Chimú and Inka Occupations. In J. J. Christie and P. J. Sarro (eds.) *Palaces and Power in the Americas: From Peru to the Northwest Coast*, pp. 313–352. Austin: University of Texas Press.
- Martínez Compañón, Baltasar Jaime
1991 [1789] *Trujillo del Perú*, vol. IX. Madrid: Agencia Española de Cooperación Internacional.
- Matsumoto, Ryoza
1993 Dos modos de proceso socio-cultural: el Horizonte Temprano y el Período Intermedio Temprano en el valle de Cajamarca. In L. Millones and Y. Onuki (eds.) *El Mundo Ceremonial Andino* (Senri Ethnological Studies No. 37), pp. 169–202. Osaka: National Museum of Ethnology.
- McCormac, F. Gerry, Alan G. Hogg, Paul G. Blackwell, Caitlin E. Buck, Thomas F. G. Higham, and Paula J. Reimer
2004 SHCal04 Southern Hemisphere Calibration, 0–11.0 cal kyr BP. *Radiocarbon* 46 (3): 1087–1092.
- Morris, Craig and Donald E. Thompson
1985 *Huánuco Pampa: An Inca City and Its Hinterland*. London: Thames and Hudson.
- Murra, John V.
1980 [1955] *The Economic Organization of the Inka State* (Research in Economic Anthropology, Supplement 1), Greenwich: JAI Press.
2002 [1999] El Tawantinsuyu. In *El Mundo Andino: Población, Medio Ambiente y Economía*, pp. 67–82. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Instituto de Estudios Peruanos.
- Murúa, Martín de
2004 [ca. 1590] *Códice Murúa: Historia y Genealogía, de los Reyes Incas del Perú del Padre Mercenario Fray Martín de Murúa. Códice Galvin*. Madrid: Testimonio Compañía Editorial.
- 大越翼
2003 「聖なる樹の下で——マヤの王を考える」角田文衛・上田正昭監修, 初期王権研究委員会編『古代王権の誕生II——東南アジア・南アジア・アメリカ大陸編』pp. 169–205, 東京: 角川書店。
2005 「対立と融合と——ユカタン・マヤ社会の王権の特質」貞末堯司編『マヤとインカ——王権の成立と展開』pp. 139–152, 東京: 同成社。
- Ortiz de Zúñiga, Iñigo
1967/1972 [1562] *Visita de la Provincia de León de Huánuco*. J. V. Murra (ed.). 2 vols. Huánuco: Universidad Hermilo Valdizán.
- Pease G. Y., Franklin
1992 *Perú: Hombre e Historia. Volumen II: Entre el Siglo XVI y el XVIII*. Lima: Fundación del Banco Continental para el Fomento de la Educación y la Cultura, Ediciones Edubanco.
- ピース, フランクリン (Franklin Pease)・増田義郎
1988 『図説インカ帝国』東京: 小学館。
- ピサロ, ペドロ (Pedro Pizarro)
1984 [1571] 「ビルー王国の発見と征服」増田義郎訳, 『大航海時代叢書第II期 16 ベルー王国史』pp. 1–297, 東京: 岩波書店。
- Pärssinen, Martti
1992 *Tawantinsuyu: The Inca State and Its Political Organization*, (Studia Historica 43), Helsinki: Societas Historica Finlandiae.
1997 Investigaciones arqueológicas con ayuda de fuentes históricas: experiencias en Cajamarca, Pacasa y Yampará. In T. Bouysse-Cassagne (ed.) *Saberes y Memorias en los Andes: In Memoriam Thierry Saignes*, pp. 41–58. Paris: Institut des Hautes Études de l'Amérique Latine, Lima: Institut Français d'Études Andines.
2004 Confederaciones interprovinciales y grandes señores interétnicos en el Tawantinsuyu. *Boletín de Arqueología PUCP* 6 (2002): 23–41.
2005 *Caquiaviri y la Provincia Pacasa: Desde el Alto-Formativo hasta la Conquista Española (1-1533)* (Colección Maestría en Historias Andinas y Amazónicas Vol. 6), La Paz: Maestría en Historias Andinas y Amazónicas (UMSA), Colegio Nacional de Historiadores de Bolivia,

CIMA Editores.

Ramírez, Susan E.

- 1982 Retainers of the Lords or Merchants: A Case of Mistaken Identity? In L. Millones and H. Tomoeda (eds.) *El Hombre y Su Ambiente en los Andes Centrales* (Senri Ethnological Studies No. 10), pp. 123–136. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1985 Social Frontiers and the Territorial Base of Curacazgos. In S. Masuda, I. Shimada and C. Morris (eds.) *Andean Ecology and Civilization*, pp. 423–442. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1995 Exchange and Markets in the Sixteenth Century: A View from the North. In B. Larson, O. Harris and E. Tandeter (eds.) *Ethnicity, Markets, and Migration in the Andes: At the Crossroads of History and Anthropology*, pp. 135–164. Durham: Duke University Press.
- 1996 *The World Upside Down: Cross-Cultural Contact and Conflict in Sixteenth-Century Peru*. Stanford: Stanford University Press.
- 1997 Un mercader...es un pescador: reflexiones sobre las relaciones económicas y los múltiples roles de los indios americanos en el Perú del siglo XVI. In R. Varón Gabai and J. Flores Espinoza (eds.) *Arqueología, Antropología e Historia en los Andes: Homenaje a María Rostworowski*, pp. 729–735. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- 1998 Rich Man, Poor Man, Beggar Man, or Chief: Material Wealth as a Basis of Power in Sixteenth-Century Peru. In S. Kellogg and M. Restall (eds.) *Dead Giveaways: Indigenous Testaments of Colonial Mesoamerica and the Andes*, pp. 215–248. Salt Lake City: University of Utah Press.
- 2001 El concepto de “comunidad” en el siglo XVI. In H. Noejovich Ch. (ed.) *América bajo los Austrias: Economía, Cultura y Sociedad*, pp. 181–189. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- 2002 Don Melchior Caruarayco: A Kuraka of Cajamarca in Sixteenth-Century Peru. In K. J. Andrien (ed.) *The Human Tradition in Colonial Latin America*, pp. 22–34. Wilmington: Scholarly Resources.
- 2005 *To Feed and Be Fed: The Cosmological Bases of Authority and Identity in the Andes*. Stanford: Stanford University Press.

Real Academia Española

- 2002 [1726] *Diccionario de Autoridades*. Edición Facsímil. Madrid: Editorial Gredos.

Reichlen, Henry and Paule Reichlen

- 1949 Recherches archéologiques dans les Andes de Cajamarca: premier rapport de la Mission Ethnologique Française au Pérou Septentrional. *Journal de la Société des Américanistes* 38: 137–174.

Remy, Pilar

- 1983 Tasas tributarias pre-toledanas de la provincia de Cajamarca. *Historia y Cultura* 16: 67–82.
- 1986 Organización y cambios del reino de Cuzimancu 1540–1570. In F. Silva Santisteban, W. Espinoza Soriano and R. Ravines (eds.) *Historia de Cajamarca 2: Etnohistoria y Lingüística*, pp. 35–68. Cajamarca: Instituto Nacional de Cultura de Cajamarca, Corporación de Desarrollo de Cajamarca.
- 1992 La visita a Cajamarca de 1571–1572/1578. In M. Rostworowski and P. Remy (eds.) *Las Visitas a Cajamarca 1571–1572/1578*, vol. 1, pp. 37–108. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.

Rostworowski, María (マリア・ロストウォロフスキ)

- 1989 [1970] Mercaderes del valle de Chíncha en la época prehispánica: un documento y unos comentarios. In *Costa Peruana Prehispánica*, pp. 213–238. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- 1992 Etnias forasteras en la visita toledana a Cajamarca. In M. Rostworowski and P. Remy (eds.) *Las Visitas a Cajamarca 1571–1572/1578*, vol. 1, pp. 9–36. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- 2003 [1988] 『インカ国家の形成と崩壊』 増田義郎訳, 東京: 東洋書林。

Rostworowski, María and Pilar Remy (eds.)

- 1992 [1571–1572/1578] *Las Visitas a Cajamarca 1571–1572/1578*. 2 vols. Lima: Instituto de

- Estudios Peruanos.
- Rowe, John Howland
 1946 Inca Culture at the Time of the Spanish Conquest. In J. H. Steward (ed.) *Handbook of South American Indians* (Bureau of American Ethnology, Bulletin 143), vol. 2, pp. 183–330. Washington, D.C.: Smithsonian Institution.
- Salomon, Frank and George L. Urioste (eds.)
 1991 [ca. 1608] *The Huarochiri Manuscript: An Testament of Ancient and Colonial Andean Religion*. Austin: University of Texas Press.
- Santillán, Hernando de
 1968 [ca. 1563] Relación del origen, descendencia, política y gobierno de los Incas. In F. Esteve Barba (ed.) *Crónicas Peruanas de Interés Indígena* (Biblioteca de Autores Españoles, Tomo 209), pp. 97–149. Madrid: Ediciones Atlas.
- Santo Tomás, Domingo de
 1951 [1560] *Lexicon o Vocabulario de la Lengua General del Perú*. Lima: Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Sarmiento de Gamboa, Pedro
 1943 [1572] *Historia de Los Incas*. Segunda Edición, enteramente revisada. Buenos Aires: Emecé Editores.
- Seki, Yuji and Jacqueline Tejada
 2003 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el valle de Cajamarca, Peru (Temporada 2003)*. Lima: Instituto Nacional de Cultura.
- Seki, Yuji and Juan Ugaz
 2002 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el valle de Cajamarca, Peru (Temporada 2002)*. Lima: Instituto Nacional de Cultura.
- Seki, Yuji, Juan Ugaz, and Shinya Watanabe
 2001 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Cajamarca, Perú*. Lima: Instituto Nacional de Cultura.
- 高橋均・網野徹哉
 1997 『世界の歴史 18 ラテンアメリカ文明の興亡』 東京：中央公論社。
- Taylor, Gerald
 1999 [ca. 1608] *Ritos y Tradiciones de Huarochiri*. Segunda Edición. Lima: Instituto Francés de Estudios Andinos, Banco Central de Reserva del Perú, Universidad Particular Ricardo Palma.
- Terada, Kazuo and Ryoza Matsumoto
 1985 Sobre la cronología de la Tradición Cajamarca. In F. Silva Santisteban, W. Espinoza Soriano and R. Ravines (eds.) *Historia de Cajamarca 1: Arqueología*, pp. 67–89. Cajamarca: Instituto Nacional de Cultura – Cajamarca.
- Tomoeda, Hiroyasu
 2004 Un poderoso espectáculo: el Estado Inca visto desde un rincón de las punas. *Perspectivas Latinoamericanas* 1: 174–192.
- Topic, John R.
 1998 Ethnogenesis in Huamachuco. *Andean Past* 5: 109–127.
- Valcárcel, Luis E.
 1934a Sajsawaman redescubierto. *Revista del Museo Nacional* 3 (1–2): 3–36.
 1934b Sajsawaman redescubierto II. *Revista del Museo Nacional* 3 (3): 211–233.
 1935a Sajsawaman redescubierto III. *Revista del Museo Nacional* 4 (1–2): 1–24.
 1935b Sajsawaman redescubierto IV. *Revista del Museo Nacional* 4 (3): 163–204.
- Watanabe, Shinya (渡部森哉)
 2004a El reino de Cuismancu: orígenes y transformación en el Tawantinsuyu. *Boletín de Arqueología PUCP* 6 (2002): 107–136.
 2004b 「先スペイン期アンデスにおける社会動態と構造」(博士学位論文, 東京大学大学院総合文化研究科)。